増補東海道膝栗毛 三編

へ13
3694
3

門へ13
號 3694
巻 3

雅言バ也と以ふべき所を東國にてハだと云西國にてハぢやと云
只尾州名古屋熱田の邊だりたとしぢやとしいハぢやでやといふ熱
田ハでとだりもいふ鳴海辺ハだ桑名よりぢやなり莫濃所にて
も東ハぢや西ハぢやなりこれ尾州彼辺ハ東西の境目なる故ぢやでやハぢやとぢや
の混同に來たのにて俗語の鵜訛も皆此理にかりて年ハ是ぬと結たり
十返舍翁徒國の方言に精しといへども微細の所に至ては猶因とも
れぞ余ハ皆無餘國の俗語に疎きれど尾州ハ生國なる邊ハ此書にも
彼邊だりかしハ此語を訂しつ是ハ原本にハ世異なる所これ是
ハなるべしと老實にまつて此ちしを尚編の電見さく志るなり

明治二年夏

物ゝ山人

宮宿
七里渡海の
湊口

伊勢物語

いせをとこの
こゝろひの
うみつらを
ゆくに
なほこの
いせ
あるう

海上目當常灯明

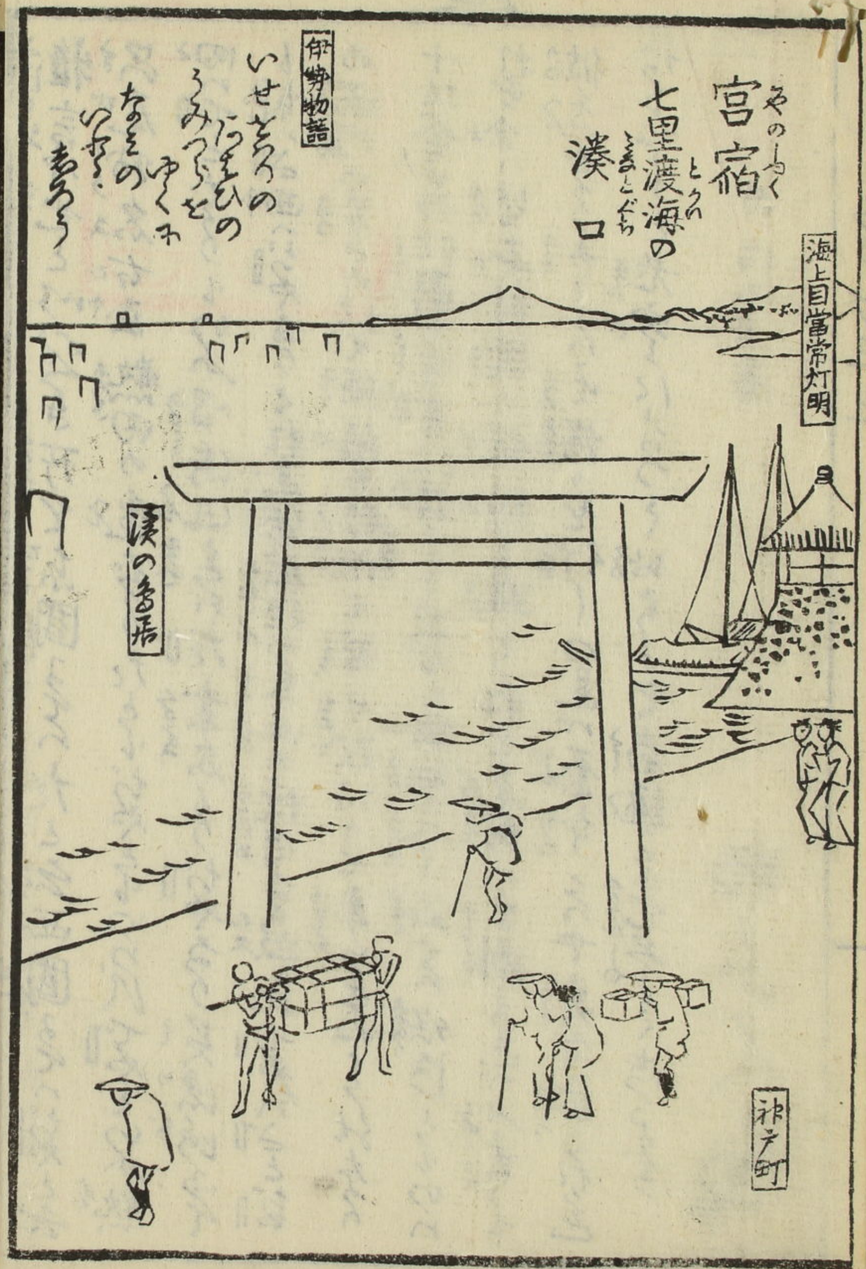
湊の番居

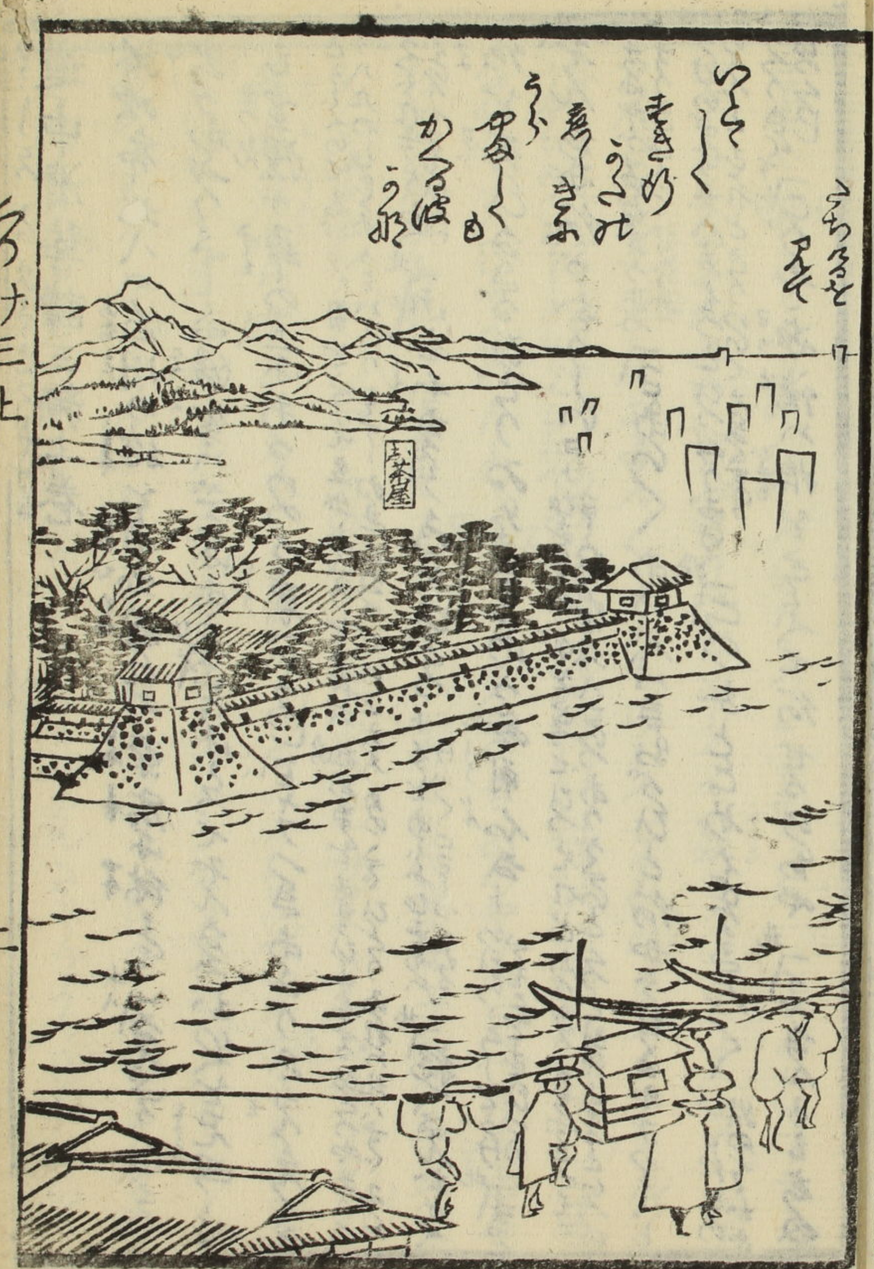
神戸町

こちらを
見て

いとく
まきめ
うこれ
意しきに
うら
安しく
も
かくる波
この水

上茶屋





道中滑稽譚三編上巻

弥次郎北八ハ夜川の辨を出離れの茶店に休みて「すんでひどく出かかりし渡し舟ハ是にあるとして見んなおもとを見ゐても重陽が来の上手あるのの裏ハいるトヒキフつきあたりにみえる

とらくので弥次郎君をみて立出あたりを見れバお茶を十八九のむすめ一人あり北八すぐ

何と美しきあるひとりおなさるのが無用ならト

そんなら何がおいらハヨトむすめのまえを見てひろれど北八ころあらかれとろと見てよるといふの

「ごあいく

あの人ハきちがひと何かせるやアハトト

「このおとどめたまさんく

「こりや旅人の婚をどうくて何せるのかや北「イヤあんまるまあ

世の今用いふきそつのようそのかうさおかしさ「イニヤあれハきちがひで

どぎるとあきんきのちがさめのとさらくて獄をうけさせえこの北「ぶアれ

どんぞこでもを「イニヤまあんくとうりのそりせるな

有でもあろうまんく

弥二「ハ北八が甘ちんのかつあのお女の呆おとろへきてその手を

あせへよつちやこのの道がとのもあの中ふ見えてもあのやう

ちと家があれてみやをる苦しせてらんあとえてこの節が

よく世るとをやかせるあのつぶふ。あれ見なせへきつかくする

婚が猶婚ハの女ごけなぐしも。イヤモこのきちがひ奴ハ闇りきそこまず

「りめくいふであるまい弥「そてさあのつらを見なせへおそろしく

あのさかりさ北「すんざおらときちがひさコリヤおのしあんやかあるく

あれく花のあくれがちりやことでうんきんとうりうんさんちゃく

藤川 とみさぶらへ 一里平七十

▲ごろら女をつかると
びろくしてあんに恥を
いれるやア
理がきとんや
せんこいつめいつしが
才でイヤモとんな
因果なとてア
どぎりや
せん
ハア

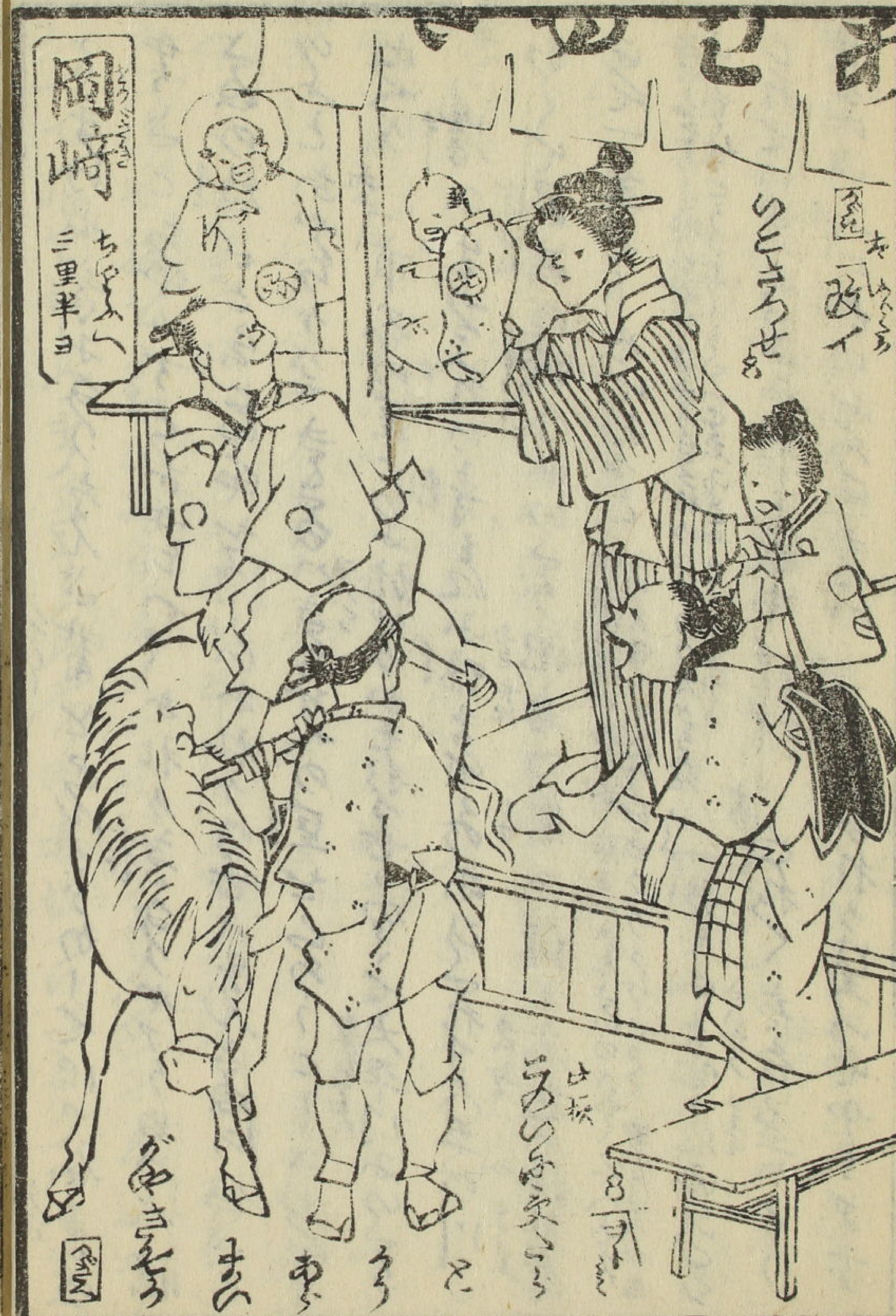
ねらわれ
ヤア
女房どもう
イヤ 徳女房
だやふく
のれいわい
さんなあろ
ういなヤンヤア
あきこらいじろ
あのとわりそのうせ
なのつらで 亀狂乱さ

こなさんが
さうのそろ
せると已も
かすいこんで
ひとりの娘が
この女ひで
ひしハ
かつきな
苦悪で
ぐるさやして
そうさす

ゑ藤やらうめ「あゝ」ふのさ時よおやぢさんあゝ
ーうござらう中ご「中ア」薬でるのんでござらう芝「ゑゝ」めつ
せうさァきちがひもうもをれト絵「ゑゝ」らうがちやらんやそやうく
ゑゝ「ゑゝ」ろ娘ハあんのきちがひもやまちがひとあつし同ちがひ
「ゑゝ」手めくらそんざのご気ちがひをつまんでござうまつてござうござ
のご「ござ」さうーお男ご「おとこ」へ、面同もわん「ゑゝ」次考さ考しごまそを
きちがひくらあるやアかめ一生の出来さ「絵」洒でも愛れとゑゐ
銭「ぜに」でござまず北八があの娘「こ」をそうくてあつうそうるとおちか
ゑつけて板をもち出「だ」して「ゑゝ」ら「ゑゝ」ゐ牛「ぎう」ゐやア
かつて娘をちうまつさうとゐそうや赤奴「あかやつ」べのごとうんでてまく

るまけ出「だ」して「ゑゝ」ちうんご「ぜに」ゐかーて「ゑゝ」谷「や」の
ゆうざともゆうすとおゆぢへてあれの書「か」ゑゝやアうぬへ八「はち」
その旅「たび」ごと云「い」ゐゆをそうーいおれがゐ也八まんさゐの旅「たび」ご
うふとおやぢがハテきちがひくゐの豆をこうこうこーおやぢ
ねうう「ゑゝ」市谷の豆とのふ地「じ」ごおる也。かくて大平「へいわ」のう
「待」ゐは生「お」ゐる芳「ほう」の青「あを」小豆「あづき」餡「あん」まで「で」みひくる大平の川
かくて長「なが」唄の城下「じやうか」はいうう泡「あわ」雪「ゆき」の宿「やど」は休「やす」ゐあの湯豆腐
はん一盃「ぱい」そ「で」めてゐるこ「はちや屋のあくざ「ざ」ゐんさのきくこ人「にん」むう
とうとうまでおうきうきうられのさうのう大「だい」ぶ「ぶ」
山「やま」のこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
とれてゐのはまるふあるぬれお「ナッテトリッテ」
日「ひ」ゐのさ「三」兵「へい」のそんはゐるへ「二」
「きくはまあ世「よ」だゆうくゐ
「とれくおそ云「い」ふどう
「どれおれがひそつてやうアず

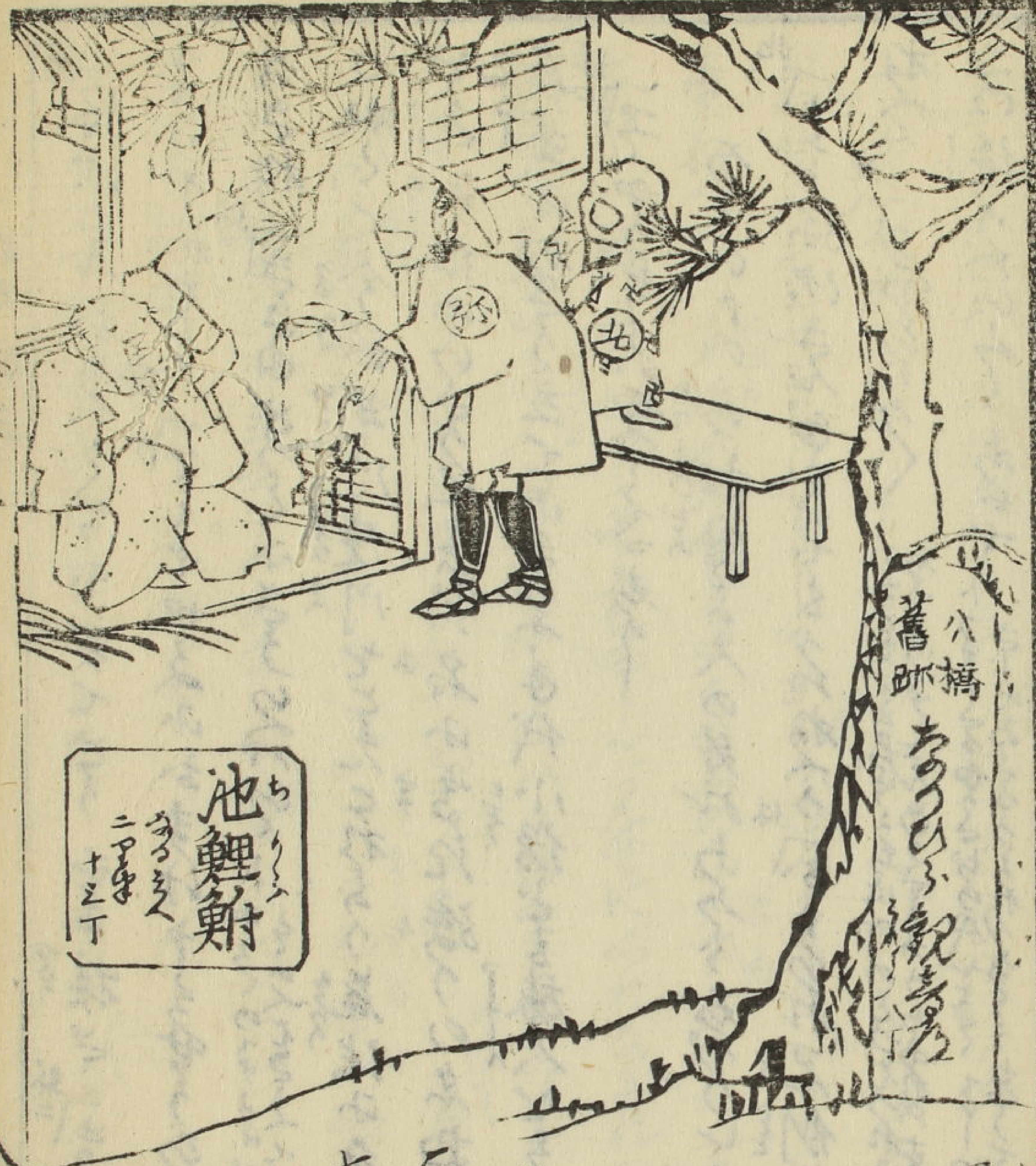
北「ヨイトうけとれか輪違屋（ごちがひや）へおとまりなら但し下旅籠の
津の国屋（つのくにや）へあそばれまするか　弥「さんぎやう」と言さんハナ碎あそばすと
あのひまるのよかお世ぢややの女ハまあよいお方さんそ　北「いやもうかる
折から播磨屋（はりまや）で手形をうけとりにきまのがあるから、ひとつ出すやうに
弥「ふうさうかし　ありがたかつたありがたい二ぶびたおつてそのさきのゑんにつき出して中ちよちよいちよいと入れ　北「さんなさきがこお逢（あ）ひ申
来かまいさ「何をおかくおまどりそしいかと言つてこられ出やあなたのハ
ことしい吉田の升屋（ますや）であつたすかア　北「ハアさうかいろ是ハト縁のさす
弥二北八八七のそびを見て、女ぶゝひのゆらしくさうで　ゑゐるもぞうくにいまちのとしをすかかひやず
さきせんの約束のうまるなり岡崎女郎衆買ひに来なければ
岡崎を出て矢矧（やはぎ）の橋をわたる長さ二百八間諸国に數ある大橋
の中にも往来の多き橋なりとかたくて平地をゆく



ところまでくると北八
欄干によりて見わたす矢作川にかゝる橋の長さのほどを
ながめ行く宇頭坂尾崎大濱茶屋の立場にいたるに
名物あれども見るものもまづさきに鎌うる店に付て北「この鎌は
いくらだ ていしゆ「三文でござりますといふ 北「あいこれらの鎌はいくら
ていしゆ「それも三文 北「イヤこれは三文でもかまはぬ そこにある草履も
あたまへとれを二文にまけてくんなせへ その代りそれらの鬼をおれ
に五文に買やせう ていしゆ「とんだことをいふおひとだ 北八「それならよした
あきれてものもいはず 北「それならこの草履を二文にまけろ
とめ顔でやきもきせうと 北八「べらぼうめ おれも江戸の侍だ
弥二「まことに そのくせ気をもむなといふ

つゞかでも袂にあけて鎌三文 かどのちんをとりひて
八橋の旧跡は池鯉鮒より八町ばかりの来迎寺村といふところにあり
八橋の古跡をたづねるもくたびれるをいとひて
かどにて池鯉鮒の鎌にのりて 女「宮で後ろからお寺にせうかな
ゑいもの若い女郎衆声どうく 弥二「のまくしめ若緒で
あしたを見てちかくの尾草履で結う 此草草履はいくら
ごね 女「アイく十六文でおます 弥二「こいつはやすい
女「アイ おきやうよこさつしやい とのざうりをくれといふ
招くさきりの銭しません 北「招きりやアきれぬ人がさきの宿から
きれるぞうりでもおまへさまがたはまあそうしておめへのとこの
さきさまでおすかの 弥二「さうぞうかうそうして

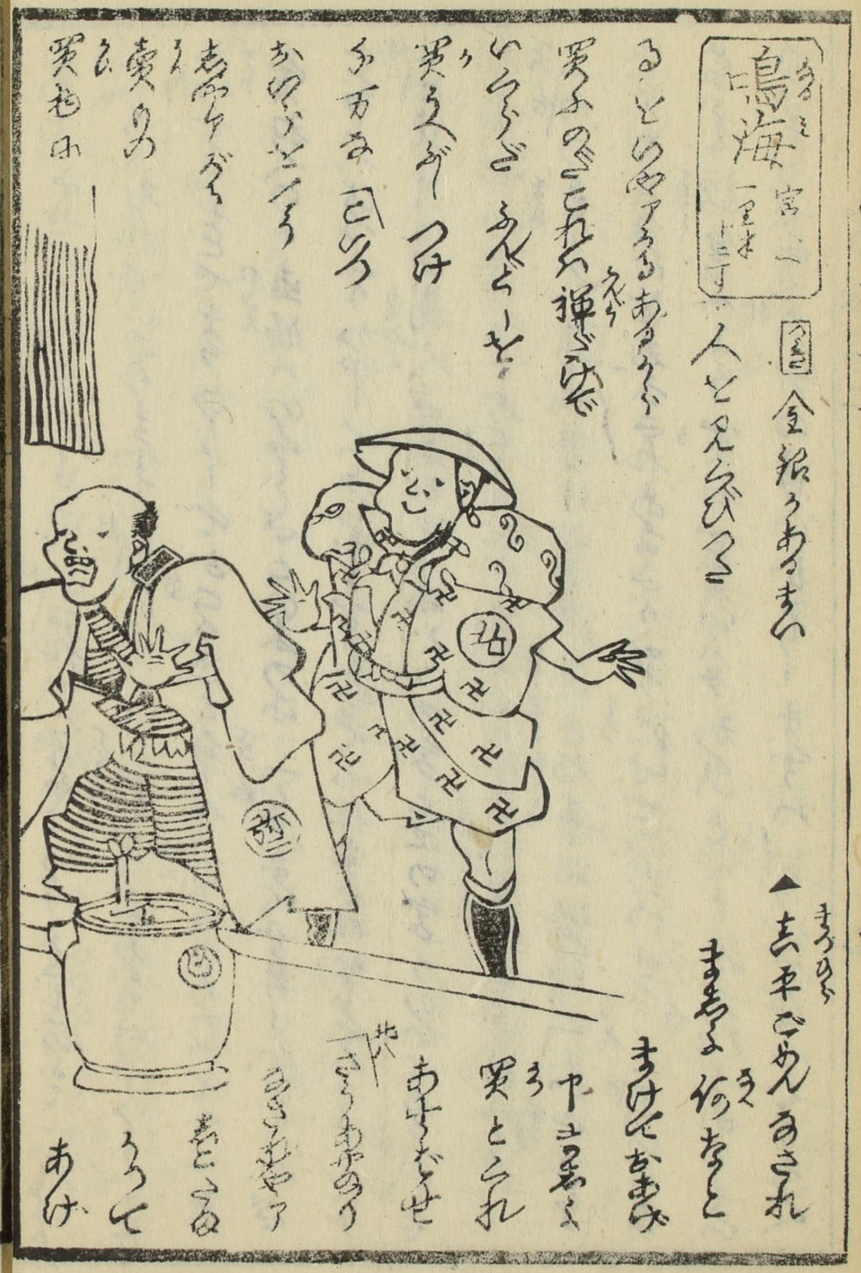
業平殿ハ鼻毛があつて重宝じや「北八「むかし代のまくらかゞ
みのゝじや　つらしてあるきやアしめ皆切りのてよ　イヤこのざうりやア
びつとざうりハ大きくてころちらハちいさいがざうりやア八文
づゝにうりやア大きな方がやすいちひさいもうハ高いナント高
亭主此方の大きな方を九文に買やせうからちいさいのを七文に
まけてくんなせへ「亭主「アイようおまちなされ「弥二「あむきん跡がこまる
一そく買ふとおもつたが列さ七文弥や松へ寄ふアンころちらのゑぐ
の方ばかり買やせう「北八「ころハ大茅ひざかりが表似せ
高うりと思つても縁あつてがざうりをかくぐがなにあるのゝ
「おさ希うでおまち一束おめなさりませぞうもかくぐまて
よくれませんかいな「弥二「十二代方へうれ松へかさすがに田舎ざけのが

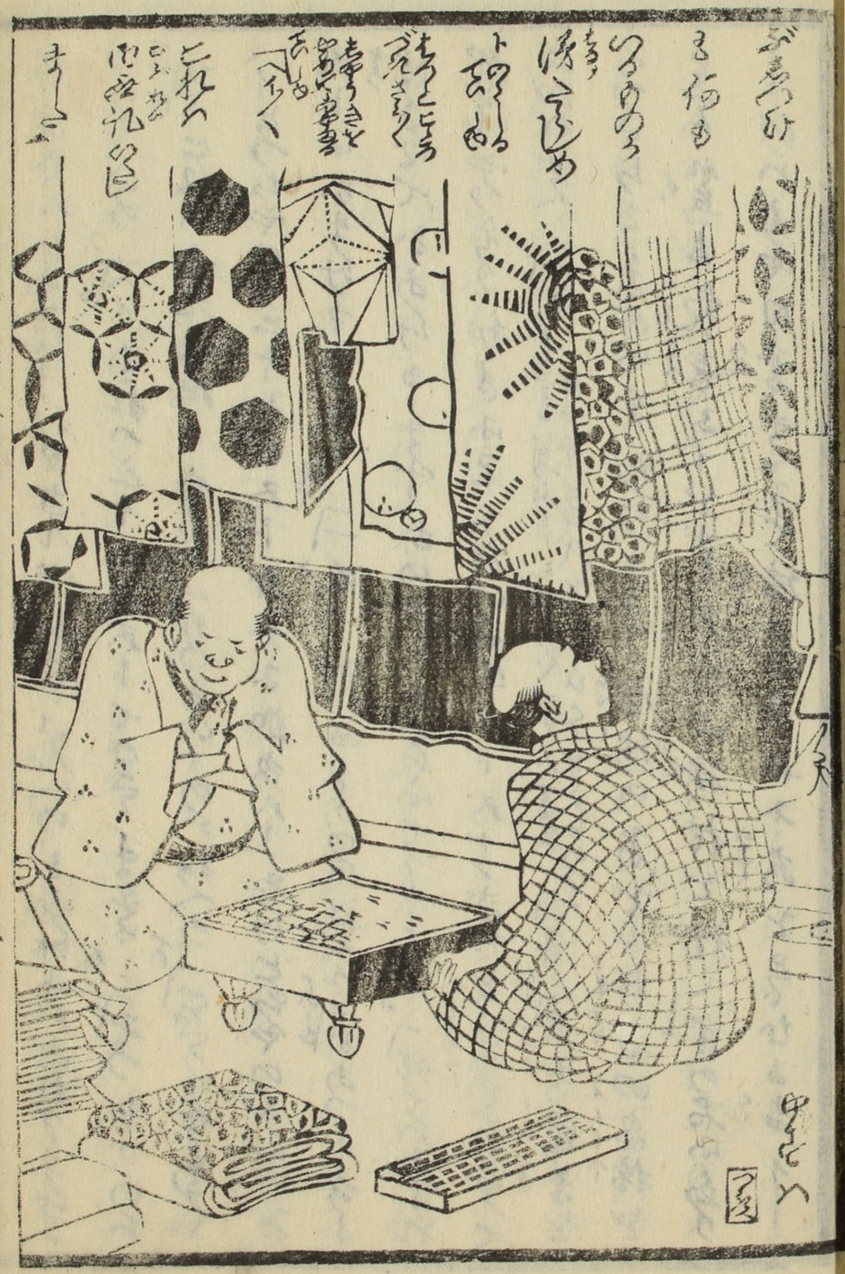


「不自由さ「弥二
江戸ざうりでも
ざうりやもなく
賣ものがある
のんごうりんきう
これにあるさうりをせ
てぬぐいやと一束で
七文あくてあけ
まけさうかいな
そこの宿の者が
ちり紙のこつくり

北八「孫次さん おめへ ゑこッが 買てどう する積ぞ 孫二「まァ さきへいつてくんな
うヽツが かれ 亭主「ハヽヽヽ十四文におまけやませうか そくおめへ
あきれ 孫二「きさま あつくにさわるのかへ トやつくのまへにさわりそうな とまえきえてゆく
○かくて今岡 判川 境川をとほりこれより尾張にある有松村 桶狭間
をすぎ 有松にいたりければ 名にあふ絞りの名物いろいろの染地
家並にかざり立て あきなふ手代小僧ども旅人をよびかけて「おはいりなさい
孫二「そこでやすいのを見ておくれ
わしいくつの有松絞を人の見れあつく 声をかけ 金に換てる
北「ナント孫次さん かつてでもおくんなさいか 孫「おめのそれ見倒してやらうぢやア
おくんな 北八「とかくらく
この 絞りかいらぬ らく 出す ト つまらぬ 亭主ちよつと 一寸ま
あがり くちのかたちの町のところまでこれに小絞これきを 孫二「これ
あきなひのたえあつまるうちあぎなひと なり
さて おまへ るうちおまへ ちよつと一ぱいおまへ さてよ

あまりやすく 時にお手ぬぐい 孫二「これサとりやつりいくらとのふ 亭主「さやう
亭主「ヘイヘイ それでござりますかへ 孫二「のつけ 亭主「からッとあつくらヽ
おつせる 作 そとでまつからしておらつぶるゆゑ 孫二「そくとおれつてとれ
売ねへのお座候へいらぬそとのふのに 亭主「ハテ さてせうしいお人ざ
そちらへひつらつかやしてあちらやうをみせて られきされ そらぞろヽ ハテ
孫二「とのつさんご商人ごあちらやうにハウの字とエの字うかいてある 亭主「さうで
あらアず コウト 六ト 太屋ぎれでござりまする 孫二「ちくまけろく
亭主「京の夏もえ京のまけエずは 下手物素人 孫二「お前さァ
まア あきなひとあきされ あまくらぐ 結てござらつ せる 一ぱいなる
どこる 敷居かまう 買や茶々 ハテ あひとても 金銀があくらきの
きのたゞでや我方の手におもし ますへ 孫二「なんぞ廉じねえそろめく


鳴海
宮一
一里半
十二丁
人を見ればくる
▲去年ごめんなされ
まちなさ何なと
まけておまけ



弥次さんおめへおつかアさんやおかみさんへのみやげ物にあれがよからう
ゆびわの 亭主「ヘイあれハ三十六文ヌトでござります 孫二「そりやちと高いのみ
亭主「ヘイこれハ十九文にヌトヌリン 孫二「もつとやすいのハねへか 亭「ござりますとも
ヘイこちらのが二十七文ヌト此分ハ廿文ヌトかけとちやのが三十二文
ヌトにおまけ申ます 北八「一文でも安いのハ銘人か 亭主「おあつらへなら
蒔絵させておあげ申ます あのうへへ名をおいれ申ます 北八「銘もおあつらへ
申せん 宮ゆへ初手に見ておいた所六十文ヌリンぎれを手拭にかへて
しんぜん 亭「ヘートきるをつぶしにまぐ二文ずつまして呉す 孫二「大方道中を
孫二郎の代をむすびてぞ立ちける
しつらひと急いでゆかけがら ト 鳴海の宿を出 笠寺観音へ 山田鳥居を
さがり塩ひき観音へ参りを戸部山崎村を経て宮の宿に至り
ここは熱田の日暮まへにて旅籠屋の立出おしとどむる声々

まし「あなたがたおとまりではござりませんか おあひやどござります
ませんか おとまりなされておいでなされませ 孫二「とまりやす
どこにありやう 鱗やか紀国屋か 北「播磨屋か 山城屋かト きてかおりをみて
それよりこれへたよきに見て さしたる事もなく 北八「それならとまつてやらうか
ヤ 女「ヲホヽどうでもようござりませう 北八「どうでもよくばてで
とまるか 女「あなたがたのおすきなものでできますならしあげまする
とあるゆへ
それよりおくへ通ると 亭「お支度をあげませうかおあしがおきれいならおはやく
おはやくなされませ とおくへ入ると女「ヘイお茶を 女「お風呂がわいてます
ござります 北「旅のくたびれがぬけた 孫「うどんでもとつてもらはうや
北「それよりさかいあんまでも よびなさい
そこの名物でござります ト きてや
是ハ熱田駅旅籠堂おんだと云 手水鉢の建立お志をおこの

やまする　孫二「北八けんあげてくりや「これはまことにありがたい　ト　せがれ八文

「ヘイ私は実お浪花書の弟子か「なんぞ書て遣は

歌書さんはお出まするの。私いまだごソレみて書きませぬ　ト　又八文をとり出てやる

孫二「又八文かきさまは何の建立ぞ「イヤ的見お私で

ござりまするが又お佐屋まいりでござりまするか「孫「私にもせう云

孫二「私もいくがおいらは私で人なせる小僧をするがごへくそ弟一

ねんへ出ねへねへとある七里のるといふりんごうぶこふく云

おくられずどうしこのごらう「イヤそれ出たいものがござりまする

さのまたとさ出れいつも併のつツ不せ出来してあげまするは

あるこれらおまあをおかけすといふでござりまする「それなら

それをお教を申せ「ヘイく先だ話をあげませ　ト　これから会

孫二「へ　せぶろでらんねへ　どんなぐこいらし　まき志よろま

花もうれしあのおくさ人の　うかきも慈と岩代の結びぶさの　ときやどれるくぬくも云ま

北「イヤとろへいて声ごさんとあんまきんつしは踊が上手

ござめく目がつゑるとあの唄でひとろをぞろてえせく人のんご

お　私も踊は大好。とそろまされる者をきいてるおかしふ云

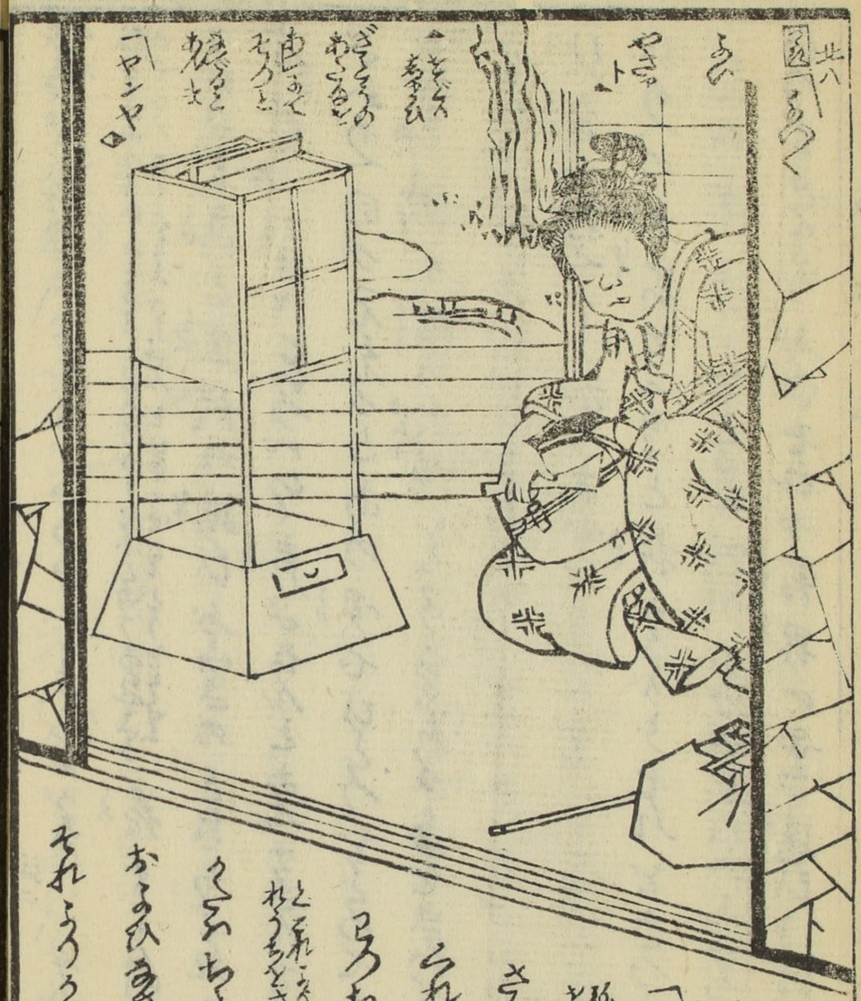
さるひでひとろおやりなされ　北八「それはやらうがはめてられなんなが

孫合がねへそうからおやせうつらしがとどろをおさつさ所で

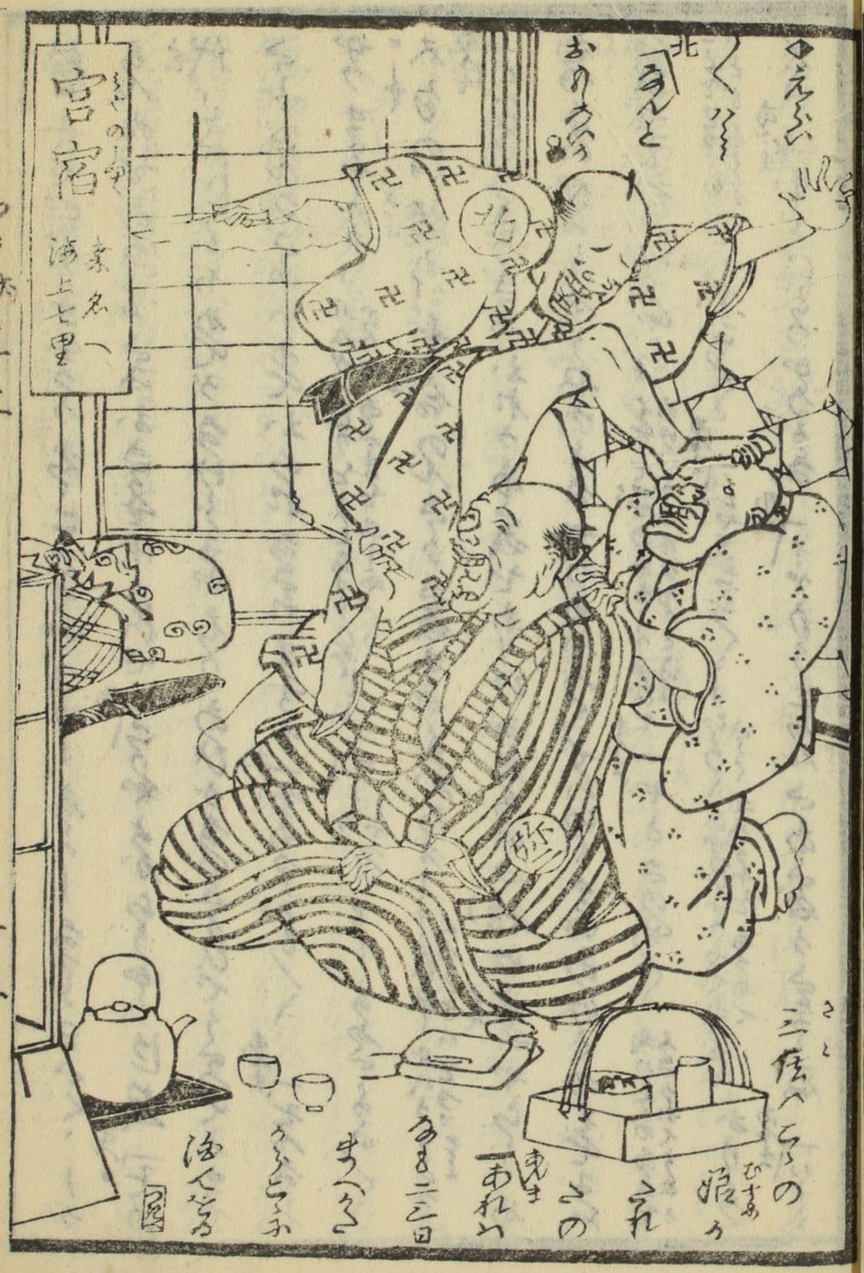
おめへの天窓をチョイと拵へうからそれをきろうけ不不めん

らんなうしろソンをとるそとけぬ思ひはふろう若さいはいつ

いつるさゆうりぶきそれが若界の思き遠ひ　ト　さみせんにあはせてせくらおどるまねして



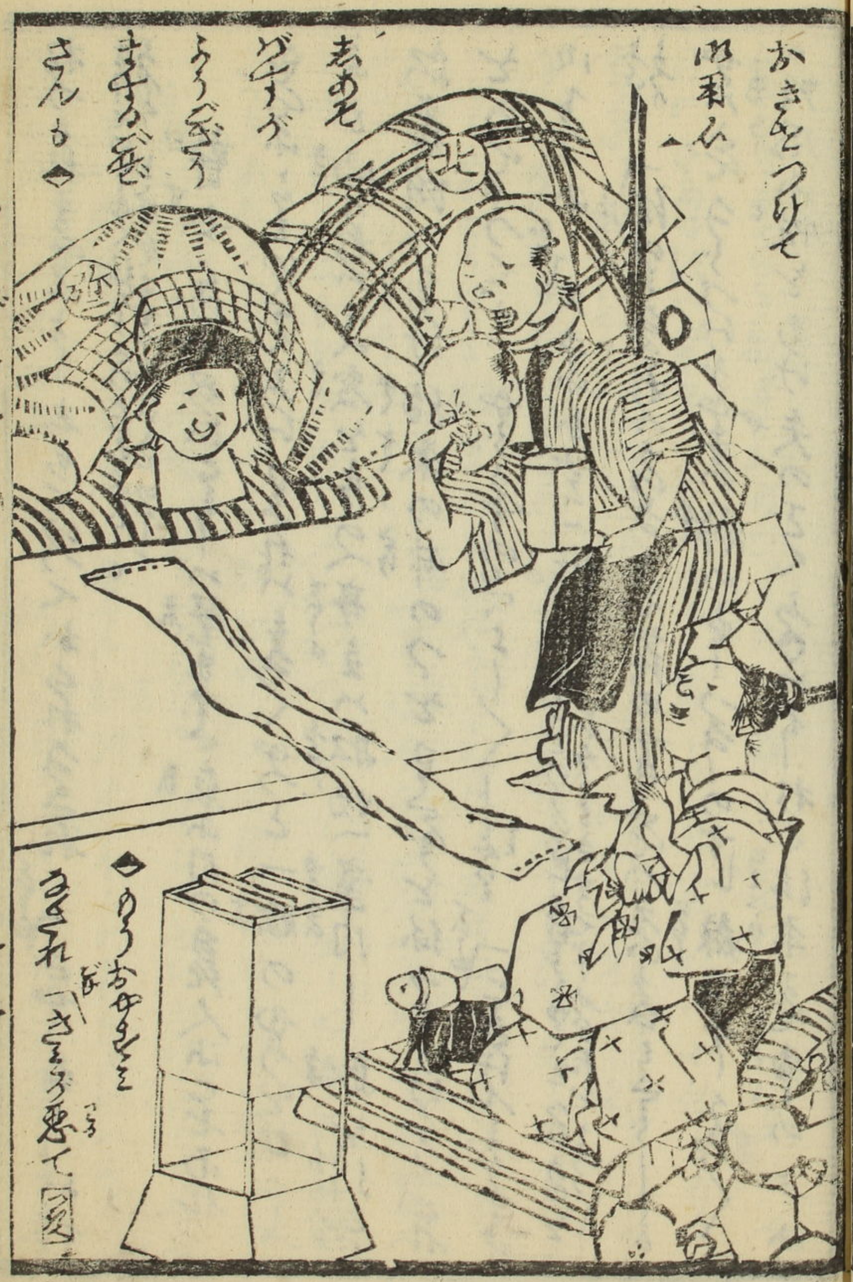
◆りんこうやう
トきこそうあいそをきう
「ヤンやく
孤そんなもうふ
「あまま
さんがいとのもあそ
それはお礼は
ろうちうんでうきう
「それは北
「ありがとう
ろうちとおあさんでう
おう北
「ヤ
それうアあのきうの



瞽(ご)女(ぜ)でござりますからして二人でさへあるに、よそのしらぬところへ、しか
まん九をあるくがふにおちませぬで　北「そりやよからうがゆふはねへ　あんま「そこの
代(しろ)ものとしてはわかいもんがすけないゆへ、あいかまいさうひでうろうてもさぞ
からぶんのさゆわめておられきされますから　北「ありがたふござる　あんま「ちんあん
やりませうよう　ト北八がつむりをもとあつかひあんしをとりてあたまをひしやく　「シヤクシヤクてゝ　よかさくく
又今の按摩(あんま)は　さあ合のんでの　さよまさ　よかろオト　北八がそのあたまをひとつかみ(?)
「こいつはさうきにおれがあたまをあしけに去ろいさ精ね嚢やらうか
からだやらうめらねがあたやろめいろくでいゝくまいあけくのまそまい
らびでもつるのだや　ト手で耳のあたまりかびをぬけいきのあをなんとすり　あんま「やとさのせく　北八そのあたまをふきられてうぬが
やニヤく　あんま「レヤシヤシヤくトいよく耳をしかつてあたまをさくく北八ゑれをたちめて　おわりた
く　あんは「まついひよろめろうま　北八「イヤかうこめんさあたまがさうふね　あんま「ハくく

ありおかしさかつさ　此うち弥二郎兵衛はのまへきのかおきもちらとして　弥二「和尚ありとやらにおく　北「イヤおかしかれ
かう湯にはいつてきたらあんまさんかういにあらう　トいひまでふろにゆく　あんまうつる女さして
ことをとろてゆく　弥二郎兵衛そのまゝねかけるる北八も世話をえりて「弥次さん瞽(ご)座(ぜ)頭(とう)のあろかのところとんださ
ゑくゑしい瞽女さ今湯からあがつてくる時ひさりのご亭(てい)ががてうつ手ひばかに
まごついてわるさうに小当りにあたつておいてさあつくせがひねへかつぶさ
弥二「トレくとえひむきふすまのあひのかさりのそと　弥二「ハア嫉(しつ)妬(と)ふかくいきざコリヤ此まくでもおられぬ
ゑ　北「さうかまらぬねトいつてふきはしらかりおのれのまふまひうけてかくとそふいゑきき
こやのそまもひかえるをあんくとあけかけへ弥二郎兵衛ふとおきあかりかんれば北八あんとうか
ねかかしかうすふおちつきててなのふすまをあくとあけもろかたをおへあそうの亭主さんさあね
ねかりむなされとさせぬめの座敷へあてぬしてらにまいしくあろいにいゝまんあろろると
あまりにうくくてねてあるもなこれのやまふまりてむかつきがてくそろくとあみしゑてまとよりのうんと
ちをうけれいこせのきわむちめをさあしうてあれ　てるきえかてあれ弥二郎兵衛うらひとうろとゆく　瞽(ご)女(ぜ)盗(ぬす)と一盗(ぬす)賊(と)がまいつてさいく　お留の
流ゝへトヨあ紀ちゝされ弥二郎兵衛あやえんひとろのものありをとうけふれてあとさきそうしこ座が
まとうしえさあしまあくくろてよきひつくりそしらあ見(み)かんしてねてみるを　北八

とくよりめをさまし
くらくてうろたえうろひゐる。とまりさしぬくは
ていしゅきさう「おまいかさとうしまされた「ごせ「こしが
このたえくとろさ かるしはつこを誰てや しらんがとりに来ましたいなも
あまど
両戸でもあいとるか見こうりやアせ ていしゅ「イン子どッこもあいと里や志ません
ごせ「きんなら今のぬすとはどろぶしたのうて ていしゅ「ハアアうぶかえうあいとる
りしくお隣のおきゆくさま 隣(げし)なつてござらつせるさうな 弥二「アウ
ムニやく ていしゅ「イヤこゝにおちとるは何でしらん下帯では。のりくおきゆくさま
これはあなたのでいござりませんか ト大ごえ 弥二ぶ たつとおあひそろと
あるをあげてこれは弓を きりふんとう
ごせのまらぶめとうぶ志きぬこしにこぶまらぶめとまでなかくなつておちてある由 北八「なんぞく
とりしさもとりしくのじくしてある 北八 こきとりぶ こうくおきなかり
さうぐしいふんどしがおちてあるとはドレくそれかとりやア 弥二さん
かめくのちやねくか 弥二「こゝなさけないるとぬかしやアがるト 北八かるぎのそでとひくていしゅ
さそいト しらうちしてこゝろの
うちにおろしくおめひ ていしゅ「イヤのう 横(ぶ)のるでござりまされば かんがひに



ねつかれませんより志せていつてかられなされ「さやうなら」トそこそこて
まつてゆくゆく孫こうもあとてをのかしてふんぐりとこそ見る北八ハふんぐりて

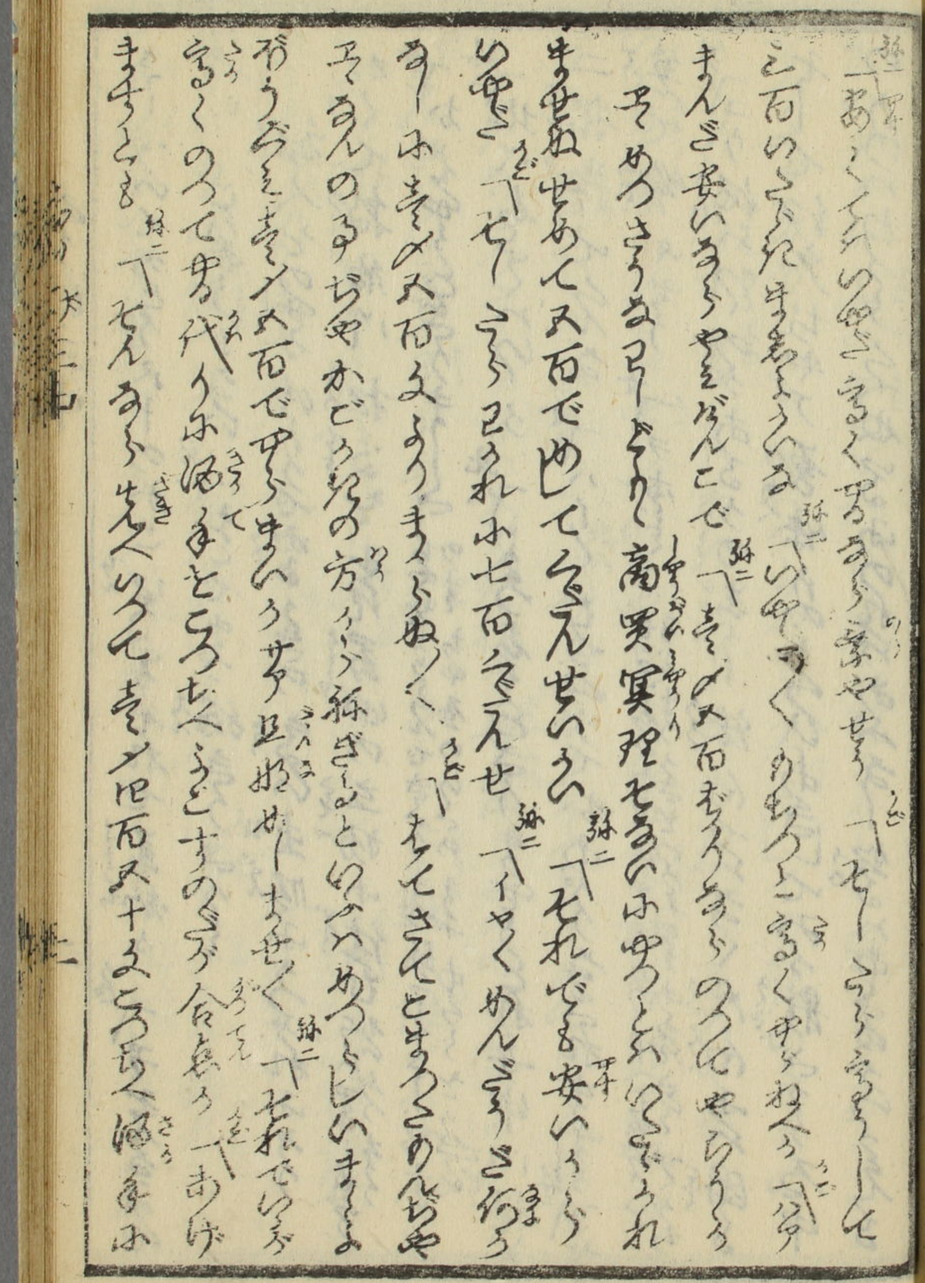
聲女どのに思ひこそしハ是もまた意に同の事人にこそあれ
正ぢにあるもいてくあけ見れバまなく世つと一瞬の世界をむまぶ
よりも的なれハ支度をとてのへ亭主ハ私妨へ案内し私を引合
私裏所へこぢけ弱米の俳のつを見てすを孫こうかけて「これ
をあてがつて、ナ、ト世ぢうすのごとしく」ト「ごきけんよりまぎ
ぬりは「大きにおせつこ」これよりあきまふ子とのりいぢ あるくゆくと私をうろ
ふ子「酒のまされんかいな」ハ世の世きこそハえいうなこそしも
世にてならづけが世にハ鰺のまし つまのすし鯨のさしかりく
○鯨風に帆をあげ矢のごとくふ世ハ有れど給事まで雲の上に

座するがごとく私中おのひくの雑談もまたハ眠をのぶして
月のさめるほハ業者にあらくなる「あくよく」ねてハ時に小使かゆる
せうぐ下子に用意の俳のつて夫人にあてかれ小使するとさきの方のあまりうふんまれぐして子の中小さんこれとまる男のりあひまくなりして「コリヤ
なんぢやい」あが君ありあるれる「これでかむびんでもうつぐかしやせんか
ソレしく蔵ごうつまる烟草入も如れからうのごヤア おまへ小用者このうト
あるあられ孫こうもきるとつぶしまりいけのつそうくすてもすつずまらくする北「早く孫次さんとんごるを者これかゆ人
小使をするならそこへあてがつてつのさんを姉人出して者こむのご
ごうらあなかあるのごめつさうな私の由ハ小使ごうけごきこれ人く
「おれハまた者びんの指でてで者こんであるでふちあけるのうと思こ
のうる「イヤハヤとひ帰りもまへ臭てあらん私ぬさんかうの者きものハまや
まへかな「小使者こハごれで私玉さ母がけられてどもこもまらんうや

おめでたいのう　ちと試て あまりろせ涼気やァ塩のせぎれあつてくろうち
のう云ふ　トひとくされる　北「ヱヽきのきく人ざ　「それくさんざつるれの
さあこいつにくらこれも子持て あまりちせの　弥二「イヤこれハそつちがよろう
尻ハ吹弥ふうるるう　北八「むかうのひとさんな　トふりかへりみれば
北八「さつくこれでいゝでござりますお亭主の御世之「ソリヤ
ござんなせへ　どんざ富士世の巴中　ともにまかせあづけて
道中滑稽譚三編上之巻終

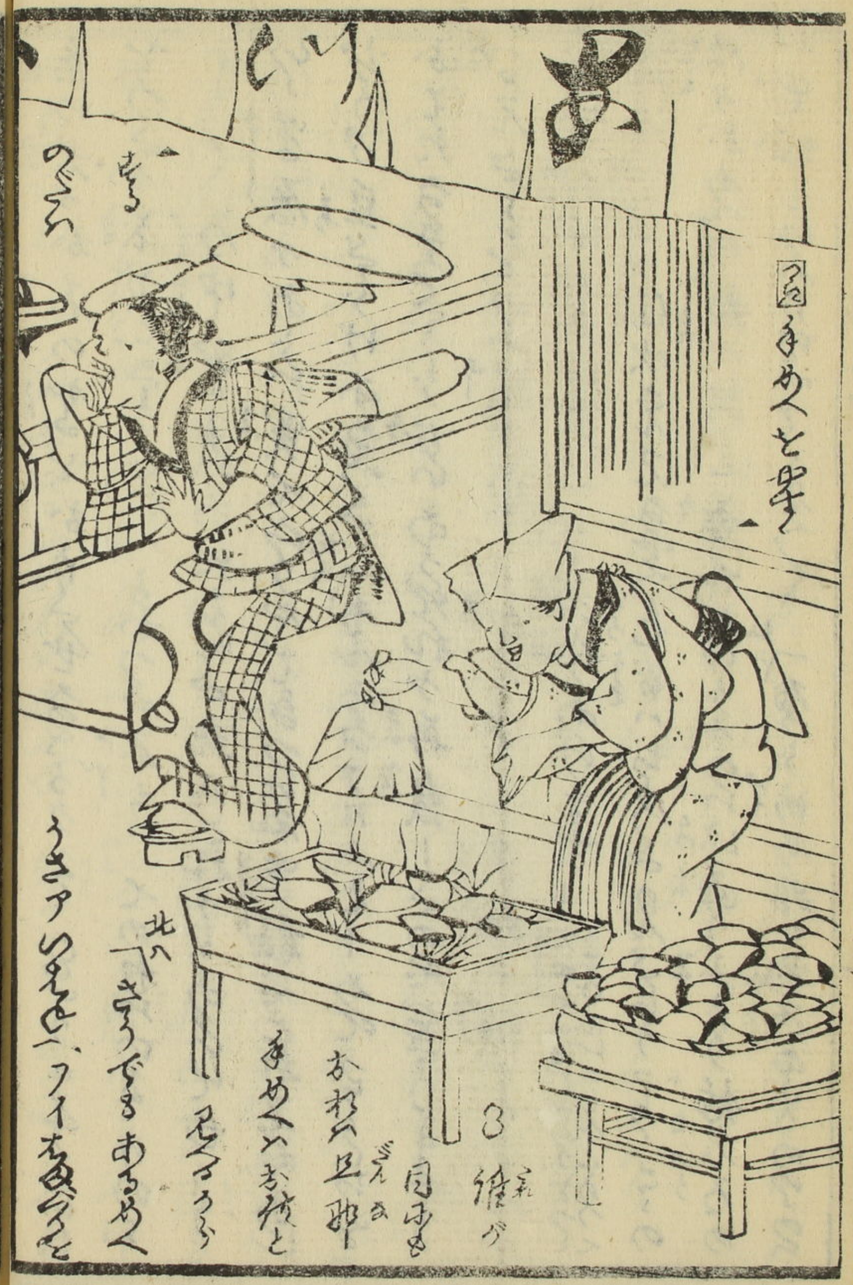
道中滑稽譚三編中之巻
されバ旅人ハ海上安穏の浪に不知火機嫌よくと　北八「なんと
弥次さん何もおくさまざるあまりおちやアなさいうおめへの荷物と足し
がのきらつあまりでいつろかいうで半日がもうの丘形と東来
のあうちへござりだらう　弥二「ソりやおのしそれんまうまづおいらうう
丘形をちよトめるで　弥二「ホでうかへのう八ツざうう七ツがもりの茶屋
せまりトいふつい休一ぷくさいくしのみちをあまりふへろの
ハ上下といふのので出うけさう　北八「まづとしやくのおめへ丘形よおいらう
北八「いゝ天氣でござりますす　弥二「ヲサ風がないであつたうざつ大かく村
安永村をうちまちて町屋門縄生小向をとゆくかいなふ　北「モシ丘形
いろまハ名まとれうう二里半の長丁場ぢや　安うしてめさんかい

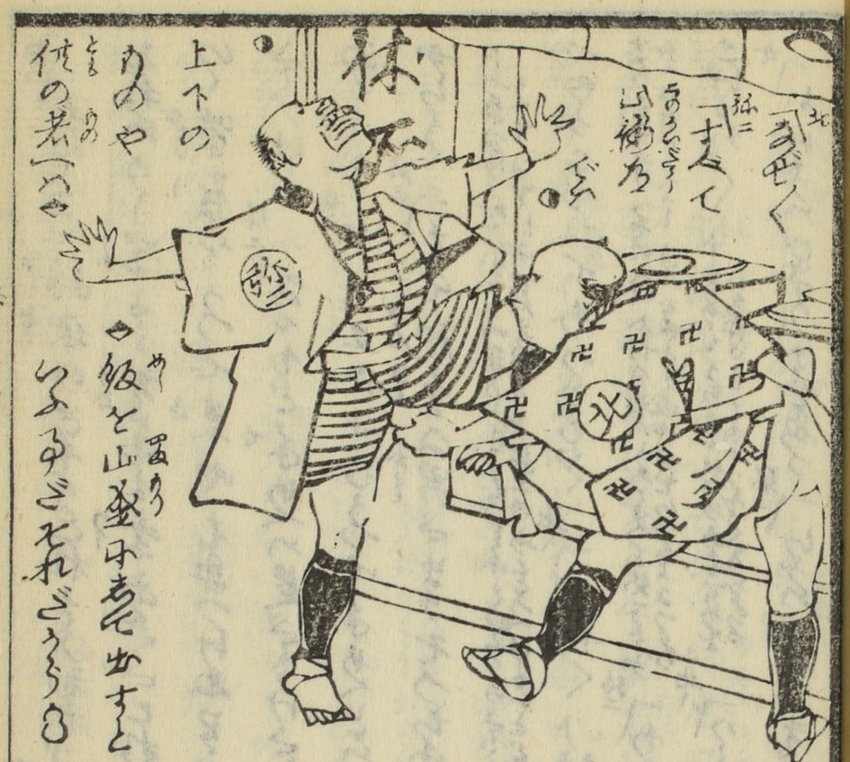
楽名
巳日市一
三里半
北
弥二



さしいひてのとりスナのかご賃ごがせれで義知か 「そこもんなるで
[illegible] 「もとでおかず 縁きりごハ
旅人をのせる時ありで雪のきの 高い垂頭にかつがれにかり
かくて鞍絹川 松当を 其外蜀田の立場に休む [illegible]
女 「おもゆうどざりましこ [illegible]
孫二 「北八 あてくハいろう 北八 「ふうあうどざりませうとれ 女中 [illegible]
二 [illegible] 女 「ハイく [illegible] 孫二 「イヤ
箕で 哈やせう 女 「ヲ [illegible]
孫二 「コウ 酒ハいくのがあるうの 書うし 緒白でハなく 片白にハ困る
そして江戸ぢやア 夢味 [illegible]
のものハわからんぬ 写ぬのれバあぶなし 鶯ハあるながつかえる

店の若がお高の鶯をおかしせなさるがゝのうどざりますといひ
をかくこが 茶やどこうまれバよかつる 不肖してのれバのるものゝ
あらく 乃中 鶯ハあれをそて 北八とれからあるいて西かう
いゝ 茶屋があらば 買てやりやまきつけぬ 茶鞋でとれ 又やあし
ぢうが 豆ごらけにあつる 北八 「あんにあるアなふまだめて [illegible]
おまえなさろうから 古いあるだれが再 [illegible]
孫二 「さんごとといふ 足があるり 和らかさうら 茶鞋の組がくへこんご
のごや 時に [illegible] 「ハイ只今あげます ト 大皿に [illegible]
北八 「コウ 弥次さん 又 色男ハちかつるもんごらうコレくこゝの
娘がおめくの 飯ハちろと 登ておいらがのハ 此 通り 山あり 鍋鬼 乃の
一里塚といふものゝ [illegible] 孫二 「奪ら 坊め 娘の 拘子 あらのいゝのハ





うつとそれを女
ハイくおきやがつたのを
おめくのそばへ
きうでもあるまいがうさアのそと、フイとあそこを
女
ハイくおれもそうおもつたくらいだ
人さんだやトまたおりくをバやすくあやアるトばくこぢをのみこむのまねをするゴハンくく
女中あれがなほ時ざくトのう七ツ半ごろうまく
北へ
女

北八「ありがたく約束のごちそうとれ、そうおれが旦那さまござりやす弥二さん

おれはめしもろくろく食ずにあきてこれからそろそろひもじさう

に空腹をかゝへて来や、きつけは足らずにちつとれ見や、豆だらけが足

だらけさ」弥二「おるかど手めへは足だらけさむかふの足がいくつもつぶれて

ねるからふ」北八「イヤ旦那にむかつて手めへといふきんのきぐこの節も由緒もあるへく

せらう」弥二「それで現金な男だまア、そうちよにおきやれ」北八「イヤさうはゆかぬ

ト つきつけるを弥二さんつきのけるはづみにちよこ北八がはづみに弥二のあたまをひつかくと
えすもみ合しにすいたるさかづきが弥二の手元へ

つゞいてこぼれてあついくいく」北八「どれく」ト 弥二がかほを見てさゆへき

ぜんぶんの茶わんをもつて弥二「きいてさるぞ」ト弥二がひたいへ
かゝりひやゝかのゆへきんとしておちる北八うろたえて弥二「ア

ト とうとうあつ入きをとられて「あつくあつく」ト とう
まゝかへきつけ

こげるあつく」ト つまあつくうちのいきのあをみをひるげるとさいごうゆうをする

女「おやけがはござりませぬか」弥二「けがはせぬがまだ腹の皮がひりつくする」北八「なにまづは安産でおめでたい」北八「つく

膏薬はまだ入れねども蛤のやけどはふせふむされるゝ

それより羽岸七少屋をこえて阿会川の土橋をわたれば池田市の

宿引「これはお早うござりまするお泊をおすゝめ申まする」弥二「常盤が

宿さ」宿引「イヤ今日はお大名さまおふた方お泊りで常盤も御用

宿でござりますればもう一方にお泊りの下されませ」ト いふうちきん出小息さま

のおとまりのお下宿ははやこの泊りもたゝさいはいとあるにてしらせまうけておしらせ

なさいましてござりますしやうなどなさいておあるれにまたまたさきへおまかせまして

あかゆうてござる」宿引「それはゆうかうござる」弥二「やゝにも茶の湯の

さまのつるろんぐ竹字にあてる百又十のたてにれ蝋燭もつけて飯を

ふせするがそれで酒を出す菓子を出すもりやく手代でも知れぬ

割に茶代を弐百やるつもりの所はあまりやすいから大にあと

ろうときくをの茶を見やうたゞ節見まするなり宿引「まことにをりますと

トさんぐ〳〵亭主ゝ四日市の泊につく

ふたりハこゝにおいて足をあらひ上へあがると女ハ世話しくかさふろしきをとりいれて
まづいつくしのおくのざしきへあんないする 亭主「今晩ハ

「さア是でござります 女中「おはやうおつきなされまし さ

ゆるゝとこなたへおいでなされまし 奥のお客さまと

どなたもおあいなされてござりませ 弥二「まあふんばり さ ト おくへとおり

弥二「ごめんなさい 「おまへさまでござりまするか 北八「おゝくたびれた エイトコナ

女「すぐに御風呂にめしまするか 葉肉ハいかゞでござります 北八「ドリヤおさきへ

ちよつくら 上ちうちう あんまも さつきより十四五のまへだれを

「お鼻紙ハよう〳〵ござりまするゝ 弥二「八 おまへと云ハまだねへ 楊枝

こんでお茶に麻糸の 弥二「久しぶりで吉田の大佛へのぼり

鮓ハあるかいな 「イヤそれハどうでござりませうか 弥次「コレ文

「とれ〳〵パッ〳〵と ちやねんのがござりまするかえ パッ〳〵

「これまあわらじの火がつゐてゐるんでせう ござらして 弥次「それ

あなたの膝に吸売が落て 「サアサア早く大事の着物

のむだろうかプツ〳〵 イヤこなたの膝に穴のあくところいを取りたれて

しまんせ 弥次さん 北八中 女「こちらのおきやくさん おあしなされませ

弥二「イヤでも あゝおまへがたにおもしろく 北八「今の女ハを風呂場でちよいと

鬘つておきなはれからぶ 弥二「それやあんまりなあ 北八「あれが湯にはいつて

知らんところへおねがひハござりますかうまいといつて 直に

そこで弱束しめまづ 鉢の 湯の 着て

おまへせへ 「赤いちよくドレ入て来ますかう ト弥次 焼酎

ハの手拭ろ白海 あちらへまいりませんか 北八「そのせうちうをまたしらんな

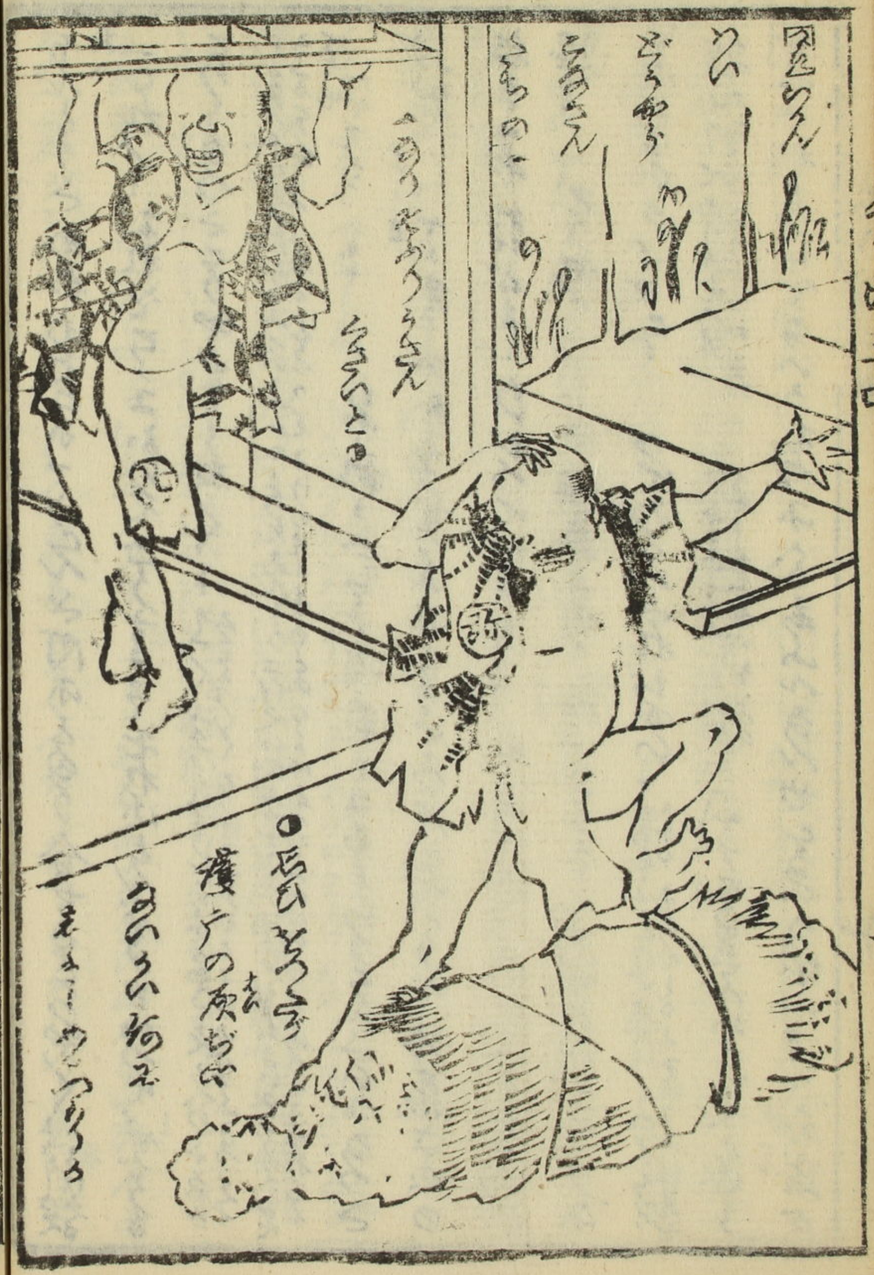
トちやつるんまつゞゐ あつねけふ 「これでこてびれが治ますまいでもあらうか どうぞさきほどからかくいる

孫二「ヲ〜〜 ウ〜〜 北「いろかくどうしたのだ「そうしたのだく 孫二「どうしたどころか
手めへあれをえらいめにあわした 北八「なぜく 孫二「もう女がらるかくと
おもつてあんまり長湯をしたら 北八「それてゆでにあつてるのうちあの
ねへたまりだ 孫二「まだあしがひまろく する 北八「ヒいつは大きらひだきや
たちな ト女のときものどぎせうたにひつかけつれうるとたのまくらせられてきちくちうらなきさうは 孫二「アッ〜今きうしたろきう
しく 北八「おめへまとんだものだ大解ゆしてあうれバいのは 孫二「イヤあれは
手前のいつたとあり大きな女めがらるだらうくと待たるとにく向ふの
まゞしのとにうの華増らしの中つが行う浜つてゐるうちこれ背中を見
て下さらねへうとひふトハイくと 云 六十だかりの老婆あがた見をもつて
きやアかつてきアあらひませうとねつあやアがる 北八「こいつはいりく ト むちうにあるおもうらたるつて
あるうちあしのやひゆてあるのたうにねこんてゐるさいうちものうちをせひつたりなどして 北八「それうら
ちやそばにするこのごいうちの人とんだきのうい おとこうて そうとこのきうへあるまでまけと

四日市

あらましハ身でもまへがころもであく病をとげうるとするも又曲でござる
すなハちあぶりものにさせるもん世人のあく病ア土足にかけさへかけさせべき
ましまんく　弥二「それやア大気の毒なそれぐらいにわれさま病を作生
の酒と出かけるそれぞれ寄馨しもやつてゐりません　ぎん「どうぞまうそうせうや
さへもやハのめてもうらハかあんまり人を酒席にきらせるうち　北八「イヤあら
生　酒ぞうらかんまんしてらんません　ぎん「イヤ事どこなさんハこりや　もてなすを
何らうにきらせるさしおらで出るハ酒のみハて生酔といふ　おや
あまうちあらましハ　北八「それぞきつきつち酒をのまさせる病が正曲が生酔
ぐうら　さんらう「うそ事しがさけをのむものゝうえハきげんよくさうさせる　北八「おあん
ぜんぶなつくなるの曲ち癖さといふものにきる虎狩をあまりうんと
うまさけさうらきされ也のよそしらひかく　あれまくさあさ人のあく病に

うらみもらうとするコリヤく　ごぶごう「それにしなさんの足ハよくハ酒ぢやの　北八「さやう
き足め下戸の方がようござりませすまうちる　おやく　生ひく　ごぶごう「それさま
ようござるあうねむうらまいろ女中く　ねどころを　とこ　トそれよりごぶごう夫婦へ　いとまごひく
こうけるやいなや世んこまちあるおずまうまんだ行きふてんかみにまたまあつて
あかしころちくへ来おく次の間の襖をつけらつてやくとつき　あかりさ
ところのかたおどをあけうちとに　蒲団ありとめぐさくさうらく今にゆう
おべきくね　弥二「おれが先陣しておる　北八「それがまくと　ずいぶんおなせん
トくしろをふりむかれるさ弥二さもおやまをとしてゆんとおのゝにふりて
もうまでおめがまくとひとまのさしくうしに　弥二がふつとあせを流しておれおんなう
らうかふくあめんにくしとそろとおれさそろくとろがけてふおめうにまをとへ
さまりくとふまがつかりとござうしころすむぐ事をがたりくまさまるれる向う　弥二ハきまを
弥「あゝこまつくさのかくまをたちまして　楓板がおちるてあらうあふら
かくらてど　あとくなあげて　おせうまぐ　おちくらさんまが目をさますく



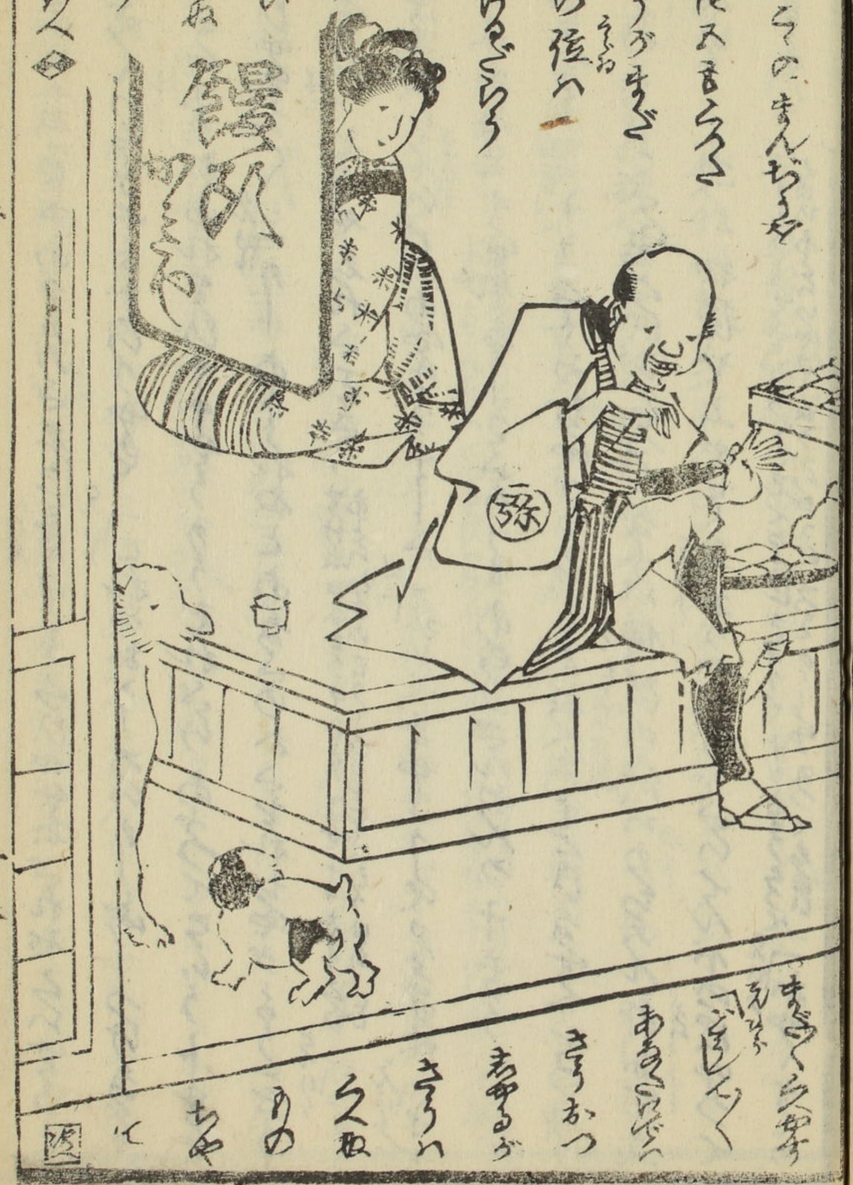
あり申すにいまろ世人「イヤそれだしだやどぎらぬ大くるこなさんが
この柄をおらしこのんでなんぜ地蔵さまのお鼻うちかいこコリヤこちの村で
今度建立せる地蔵さまだやかふ石屋どのうかうけとってあ　これ
さうく出沢なさまを」とさあにやならぬがお鼻うちかけてゐるといつ
れぬのこのとありまどいつ世人「お地蔵さまもお地蔵さまだやが
おまいがこのかにのつなんでなくいなりハ世ねうなどうでもがそんの
いりぬやうらだやあり申すにいひをるまいか「イヤコリ　いハあやい
のんだやアねへ志らきちやうめんの旅人だ「それがなんぜ今志ぶん
そこにねてねさろ世人こ「イヤこれハ手水にめとって「これけこをを
いひをるまいかあ奴ハ産業の縁さんにあるものをそなのなまにあひ
いや世んハ「さういまれだやアコろちも一云もないが恥をいまにやア

理かきこえるゆゑ亭主弥次にむかひ　亭主「モサいまそんでござりまするが　北八「どうも
おまへがたは今のはちがふてゐまどろので　おつさといふことはけつして街道
にきこえし粉のおちにかゝるこのでござります　ざい「イヤまへくるさんの
ちけのんぢやぞ　どこのうちも石地蔵さまの功ぜんなきびにきくぞう
せるつもりぢや　弥次「いくらでもようござります　北八「ゴリヤさんざ
笑雑にあふなさ弥次さんく　ト亭主わらひ
おやぢと云合　弥二「こりやぼあくるもかまのざくなあくやアこうおかうけおひきんま
かのおやぢをぶりや甘酒呑みしてせつてらんなせんおざうさまの療ぬき
にあふ事はこれもあとでぶらでらいてせせうけでころちに
めしてこのむかいまつ　ト弥次北八わらひながら
まひかけさ地蔵の数もこまがきまさかぶりする首尾のつるさま

弥二ふる家が即吟の落頭にあのくどろとうくひをゆかれしほく
いさゝさをうちあつりけり　主人いたき記
あそくとての立出て浜田赤坂を過日永むかふをまうち十七きき
東海道伊勢参宮の道に入ると茶屋の婦よびたつる「お休
なさりませ名物のまんぢうめしあがりませ　北「太閤の婚が
ろうろいの　弥二「かぎやの小ぢやくめしあがるあのだうーへ　ト「おちやア
あがりませ　弥二「まんぢうをかうて見せる　ト「あちつとせわうかいらつしやる
ゆゑんかのそ弥二まんぢうをおかぐくこめちや
せうさ　北八「いやおめくも西風どうらんどころげんにあませんへ「あまくさださ
お江戸　北八「さやうさ「ごうしもお江戸へいくと本町のなにがし
のまんぢうをかけくらして二十八文ずついたゞきますへズタの

ののじや「毎朝(まいあさ)ごろ〳〵ござる
町内(ちやうない)ごろ〳〵毎日(まいにち)薬(くすり)をよみ
又(また)十づゝうれます
一そうやそうこの
お娘(むすめ)じや私(わし)も
のも数(かず)まだ
ぐん〳〵うれ
此雑煮(このぞうに)を
いきつて
又拾(また)ひ「ほし」と
「ころもや

「イヤ
ござる〳〵
あの声(こえ)は
その中(うち)の
あぐらうれ
まだ
十ぢ
又も
あぐれぐ笑の山
おや「ナニ



今(こ)の
十ぢ又(また)ござる
ござるまぐ
その位(くらゐ)へ
いけるぐらゐ
ねる
ござる
ござる

「ごぜう
あるくぐ
きりかつ
きりへ
久松(ひさまつ)
もの
ちや

みち々てあるきゆくがあり宇津の峯七といふゑらいきれいな
ちやみせの中の坂の下に鉾のかけどくにも七十八と申ますならぬ
鋒の人は揃の名録をならべんさんとけちんにて茶やがそこらは
ちやみせが旦那さま一ツぞいもあぶれさろ世人ぞ
こいつはいゝ路「ぞんきな奴ぬけまありのごむりじや 北八「これはゑらいことじや
そのまんぢう雑にのりつき 京「コリヤわいあまんでどんびしやりの人が
さのとあう出し（て）られました 孫一「ぞんなことあいつあがかりことで（ござ）
ておめゝうぞござ〳〵と来たらおかつけにぶちのめさるゝ 北八「いゝさ
おまへも律義なことをもんもとしておるまへのどうところちがふ積ぞ（よ）
「此方市でもおれをみてくださいあかせて敷ぞ居るひきまはせぐさい
皿盤人まで通るかこれやまんぢうのあんのまずまずる初穂とられて

孫二「おかしろくもねへありくまんぢうの代がいかほどかね 女「のどやかで
四百三十五文でござりまする 孫二「いかさまくりやゝく
めしませ 孫二「いゝかぐく 女「酒手でまありまするせう 孫二「きさま酒を
のむか 女「一升酒を下さりまする 孫二「まゝ酒のおつもりをあげますと
おかつてうつかりくびあんどさア出かけるト 京の人の生まれぞんざい見えず
ある農業する様のありきる男 鬢鬚 「アノそもぬくとさまヨ
おうとねくうりや 十文手かりぬのとのわちまい孫八とふつんぬけさ
アヽ夫エ 孫二「アノ富士をおろしてみせるうト 勝手にはきかしと云うとあわた
ますの方へかまどそ来て家のつりにあるものみなさとよせかけて
のくとすゝめておりておこさうとてくつてしおいてしまへ 孫二「なんとでござく
まくの袋から今くをのゝかわり出しかけてやくそうたてひくそうれぞ 孫二「このつもおろしてみせうト五へ
下北「ぞつく一う二文字を見り 孫一「北八どうで 北八「二本さしをみるとのうちの

北
弥

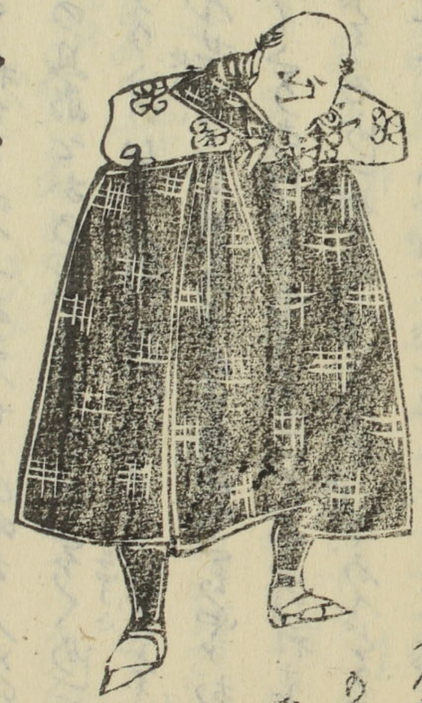
北八「つゝえうらそらへあがれとゝまんのことゞこうれだまが天上あやア あめへー
ハミとれにこの門ハ何といふ門ゞ 「うゑ門といひます そして
そしせんが二まづてでます 「それ二まづて四文よ
ぬけまゐりまゐらぬぶさせるうつへ門 見しの世ゆるかりだしよあそ

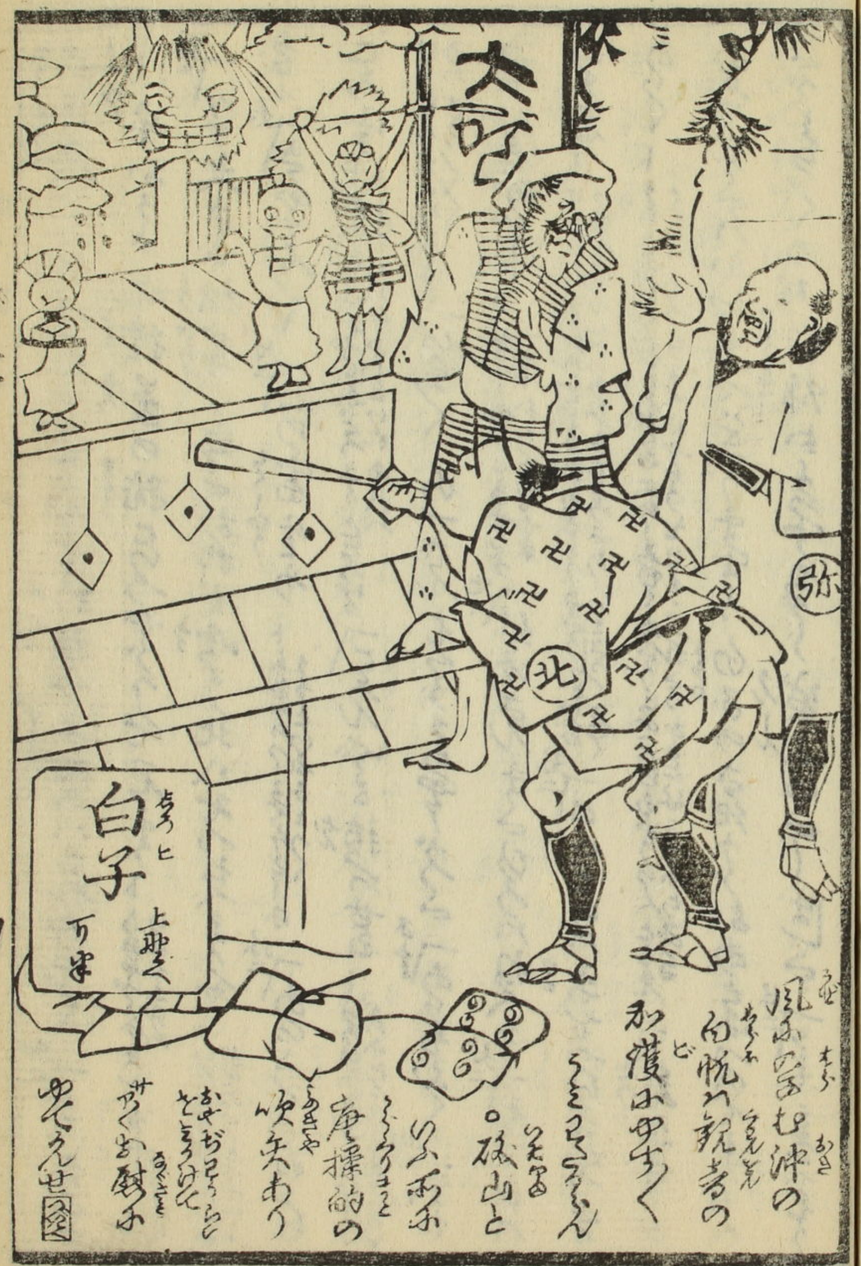
道中滑稽譚三編中終

道中滑稽譚三編下之巻

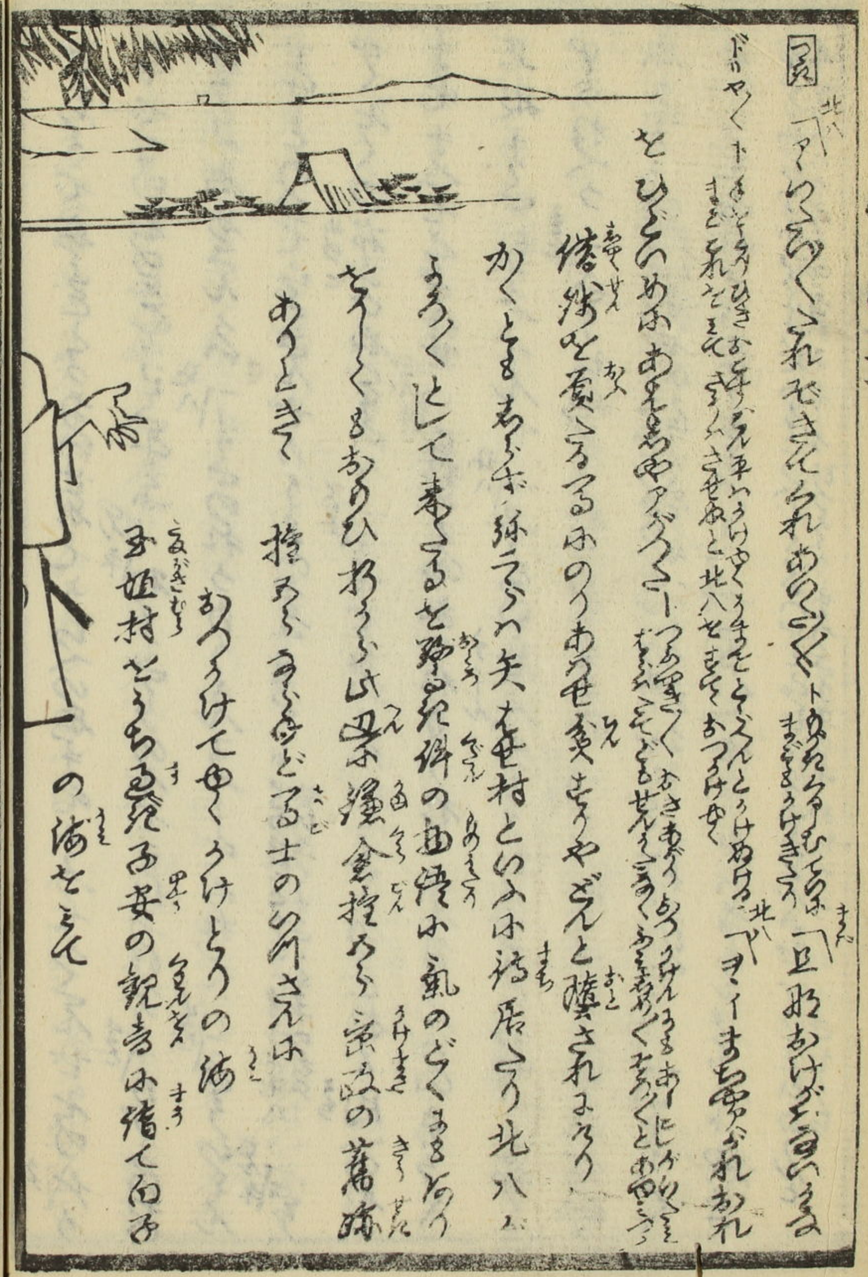
それより宮をうち門をうちつゝそうそゆくも神戸の あやくを世に葉を世に
ゆすき北八こてより宮にのる孫ニらハそろくさきへゆくとて 「ゾレ北八
右の方へうらぐゆりゞ 「ヒイン く 「あゆんく 「イヤの上世の出ちだや
あいかう今のがとゝいふ戻りだや えいとゝでいきあるゝ 「拉平さま
かいなコリヤさそ引や面目がまいがな 「あろまいく 飾日くにいとゝたまぞ
まんぞびる殊きまもいきんがな どうあるのだやりしきとゝ 「まゆく
こちきんくぞんせ 「あのまゞ あゆくきんのこゝらしゝ とゝまゐ しゝのかとゝを日あるゝ 「まゆく
こゝへうけさんせ イヤそこにハ大のハそがあるかふかいぐると あるゝあらさうだ
してかとりのコリヤく 葉あげてう海うりてこいとゝいふ所だやがこゝへ大きなうで

くべ
神戸
白まへ
三リ





大吉
弥
北
白子
上野
下野



石居慰十一帳つゞりソレふうん世新板の上細工へとれおかく 北八「ハアさんざん勧半ある課縫菱の糀とらつ乗うて見せう ト 出してみせる矢をカチリガツタリ

弥二「コウ大きな松茸が出るおれを嘘う北八さらちくあうや ト ……

あむ ト 太「きやァんく 弥二「との畜生め 弥二「あくくく、ねうらい

とうふう ト …… 「こうんでも損の甚 ト ……

ゆくふあるぶんいゝ……

弥二「いまくらの一ぶんまでうまかづくさ 「あゝおあく 北八「ハアく

さアいま母せう ト …… 北八「孫次さんまうとひろくねへう 弥二「そのくせへ

ふまを ト …… 弥二「どんどの衣来をつけまかくくろ

あらく ト …… 一 辛条あかくら

あまてかでへお江戸でどうりまするる白子のさえうかおあとふつのて来た

ふがまあくの狂孫おうまずあかく紫ふのて仕る 弥二「ハア……

どうでぼうのかを「おやうの狂名へ」…… ト 返舎一九と

中せう「さてくの名かられうの十返舎大人でさらうまずうる新れ

雲津の狂名ちやのどかけとゆう生まつてむ丈へ仙条寓でぼうりまするる

弥「さやうく、「吉田名携名古屋辺の連中方の出合でぼうのほどろ

弥二「イヤ当く始ふず立うるとぼうござれども引当ふれ蒼蔽ふなう

まずのが思めぶく嵌まま壷どうのふいじまし立これ申を是て御僕の

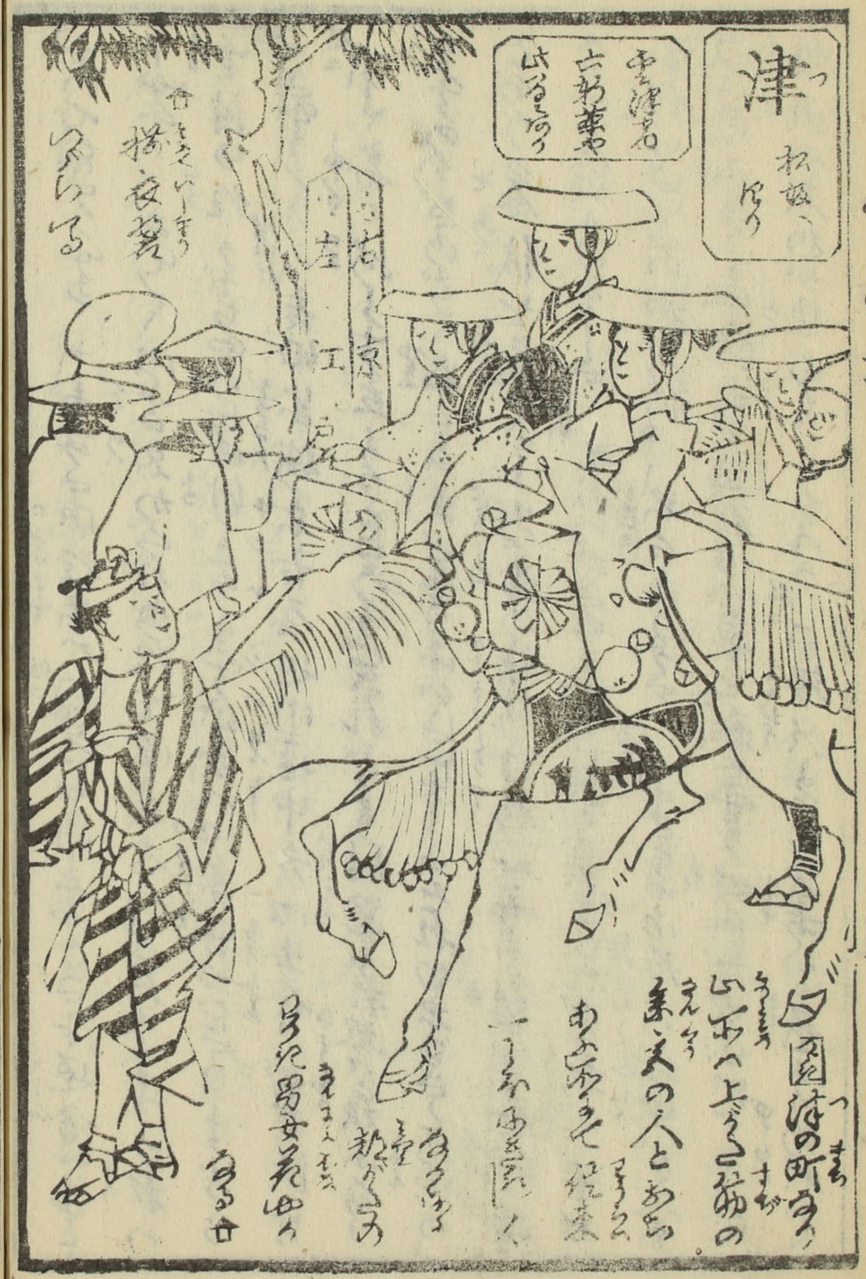
ともうの膝張をおのてし、為者の擬り日頃ふあく寄まう世風雅

寄一と出ろけましる 一 七おくわおのし、ぼでどうふすとれのう和完「ぼう七

お役のてじらい 弥「……さ 一 出台きのぶて 一 まこと京の孫家の社中ぶる……

御料免合せるのてじらしのぞれ四一寄せ秋を一ぶりら時ふえが小川とまん

纏頭の衣於一掻あかの母あせんる 弥二「纏頭まあとの果てさ。是より旅……

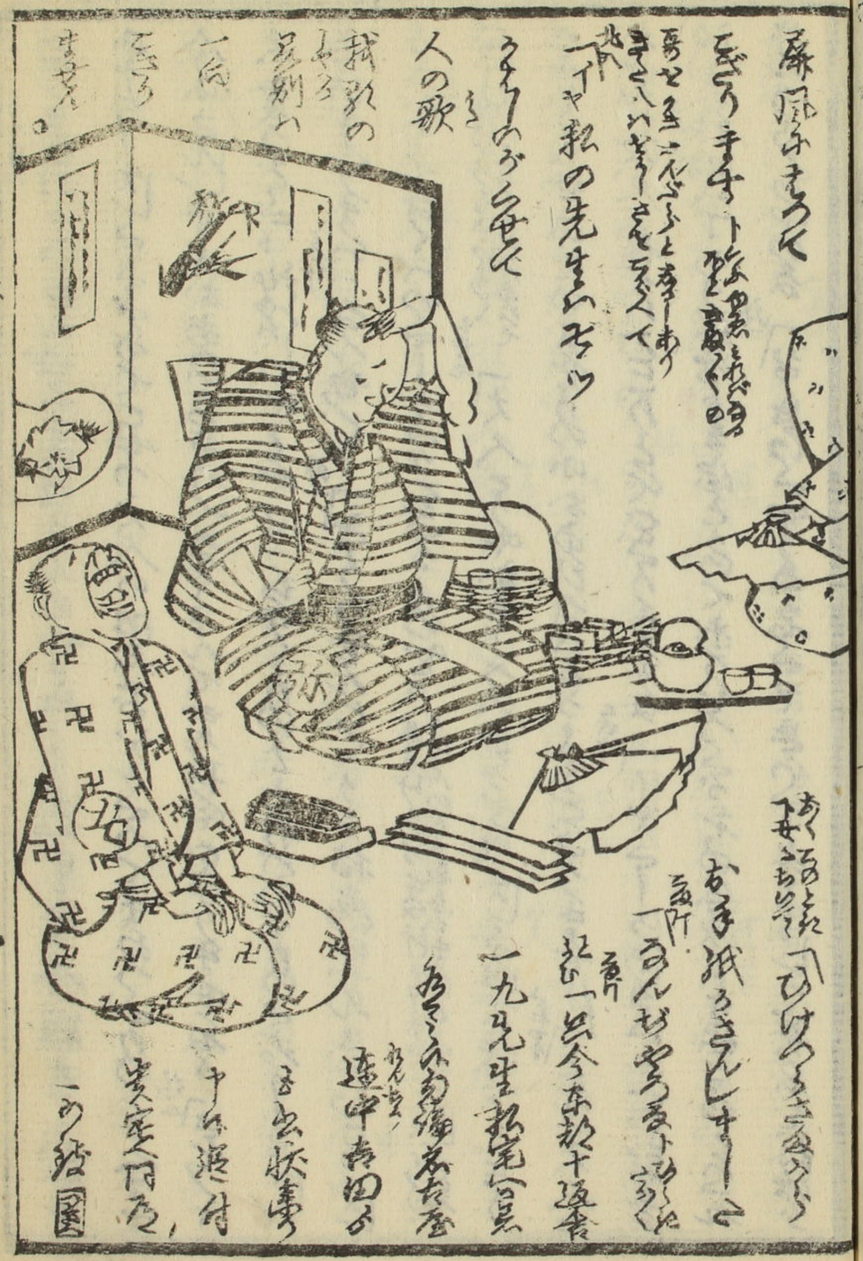


三宝荒神 富士あるともにうらひいれて来たる「ごぜれ都の名どころ
えせん 紙園清水ヤレ 青梅山 ヤアトコナア コウイヤサ アリヤリヤ コリヤサ コノなんでもせん
地主の様に幕うちまわり 震がられにものおもてする ヤアトコナア ヨウイヤサ
アリヤリヤ コリヤサ コノなんでもせん「北八見やがうぎに美しいこぶかんなる「アリヤ塔
京都の京だや あまいにアろそに出出せつても称ろう 称いつゝやせんがな
「田舎ぶんなりら 犬ひとつ 見ておられんか「さかくおつけなさい「バツ
「まんざつんかいな 京「バツ 二なんだやおまいのきせるにやこそとつゝで
ないがな ハアきこえこまひつける 据をして人のこそとをのむのびやなりう
おかんせく ノウ 先生 京の京はあまいに客いのねつとだや ゝと見に大人
のう一ぶく 下さりませ「京の老を 老ひとのみおめへもさろきにうら 已
がこそとぶかりのんでゐるこそと入をこまれて出なさろこのか「十二こまれも

ぐるさんく殊しいものを黄粉いてしまし江戸表なとで小麦を薯掫
醤油で黄つけるか又黄豆の中にいてしてくるるがこさります不増なども
嫁をいぶ姑婆なぶに喰せるか菓ごとゆて定まするが私も石は好ねこ今なも
府中にて馬蹄石の泥魚黄とあるまいれ江戸定まし こゝ抜がなりくなり
立ゆもこれぞ麦の手を持あげりの中にいてしてかいでりゝひ中りと
手あにゆれ中しこ由当所の石ゆれ格別風味もよりぐぞりゆきうぐまりこと
定まれてハ池役分にあるこいうとぞんじて「そあの石をあがりましたか」「こゝ
ましたがんか」「それハけしからん お歯の口違者あり中けぐハなきりませんかな
「それハなぜな」「イヤあの石ハ焼石でぐぞりますさぐてこんに中くとりふりのハ
水菜のこれ取りのあるあの中れ石にてかこれなされると水菜を石へ吸とり
風味がかくべつでぐぞりますありやあがるのでハぐぞりませんいいな」「ハなるる

かどいろりました」「まゆさうしてあがりてごゝんなされ
[illegible]
「まてふ好でぐぞり中すそしてあがりに
おなじ石がさうそくよく拵ひました」それハかけてこゝ立ゆきます
[illegible]
「このとあり二十人まへハ不特いてしてをります」
[illegible]
「ごめんなりませ」「ハイく見ハ十返舎大人私ハ
小繁長兄様さんさゆくどなるこれへ
蜀田葉賀丸つぎハ反歯日屋呂水泉重安金玉の和堂いつれも
おいしまりなりません
[illegible]
「これハありかくうぐぞります」「きゆくの
なさけをあらハ今ひとろうそをもつけや明六つのうけイヤこれハ秋庵大人
の御歌でハこさりませんか」「なにはこゝ」「ゆるゆるゆるゆるゆる江戸中大評判

コヒ弥次さん



夜の薬罐中へ出は以上これらのきんの中ならぬハ、ヲ先生まで今朋友らがわるう
ゆすらうはしるきてあて一寸つ大人の此名おをこうてまあつてあのとこ々ます
今はさん」とてもおあひなされてあぐさんでさうおや ぞうろ手のさか 孫二「さそく
大變なことでござりますト 弥次ら中をやとうちやくのもあれべあるものごとこしらへ「ぶ
あのまゝ」ぶ六「きんせく 孫二「ごうろせんちくうら持病のせんきがおこり候
さる事にてあくべらでーくれござるものと ト 孝うげうけ二度計はしあなんでくるう
さんの事なれ大人ちやあーうのかぶイ計はしさは不快でござり
ますらうせむそのまゝのはおあひなさるゝがよろしうござりますト ぶ六「くわは大人の
お宅は江戸表でムごとあとでござる由ですな ぶ六「イヤ一ーくあるとてのお名前
江戸神田八丁堀孫次と申てあのまゝ其の孫次さまと云れ
なんの子ちや中ござる 孫二「ゆきうて四ろ名をヲまへて手てて己と実名を孫次ら

コウいはさ　こゝを出てどこぞ木賃へでもとめてもらやせうコリヤさあかへるとまあひよ

あんまり[illegible]ほし[illegible]

[illegible]

いふまゝ追一追　旅の恥はかきすてゆへあるきさんざく

あの人ぶ是非もなく出かけたれどもそのまゝ表通りをそろそろ家並ねらひあるき

[illegible]そこやそこらでつかまりかねるもの[illegible]

[illegible]北「太平をいふなかまや[illegible]弥「太

[illegible]ましてあの時ハ宿へ泊るといふて[illegible]

[illegible]

北「でどうもいゝまりのめでたい[illegible]

北「挑燈ぢやアあるめへか　弥「イヤ[illegible]

弥二「あの家へ[illegible]北八「[illegible]

[illegible]

北「これも[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

弥二「[illegible]

[illegible]

男「ハイ[illegible]松坂へ[illegible]

[illegible]

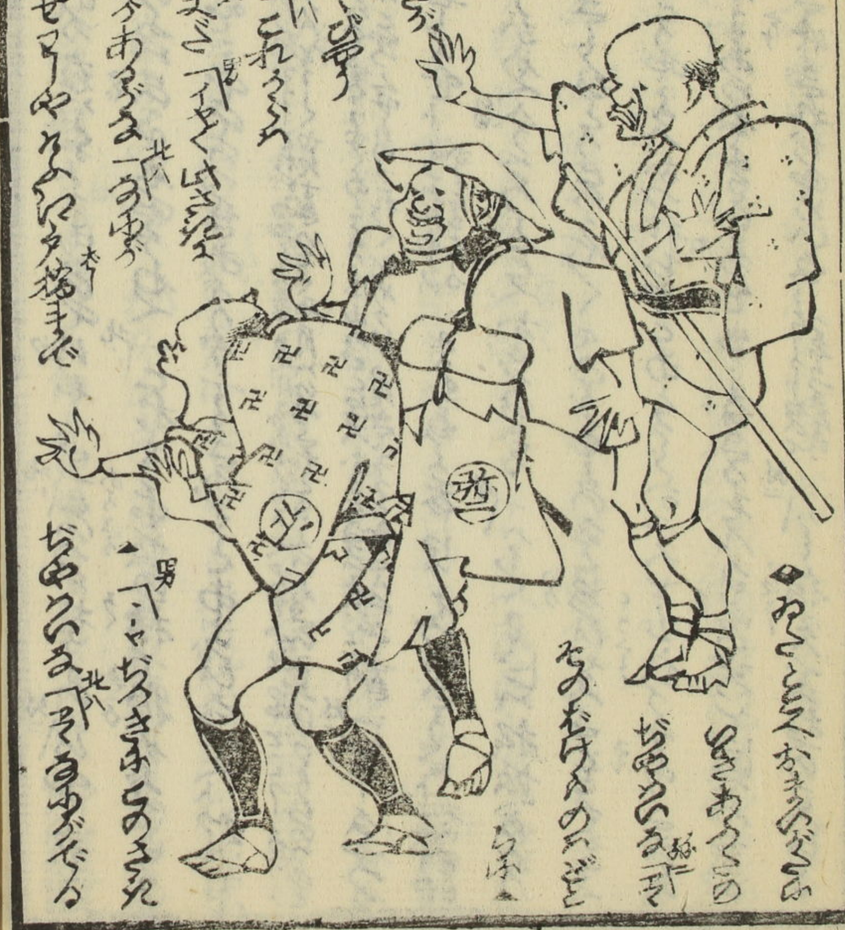
[illegible]二人[illegible]

弥「イヤかゝへ[illegible]

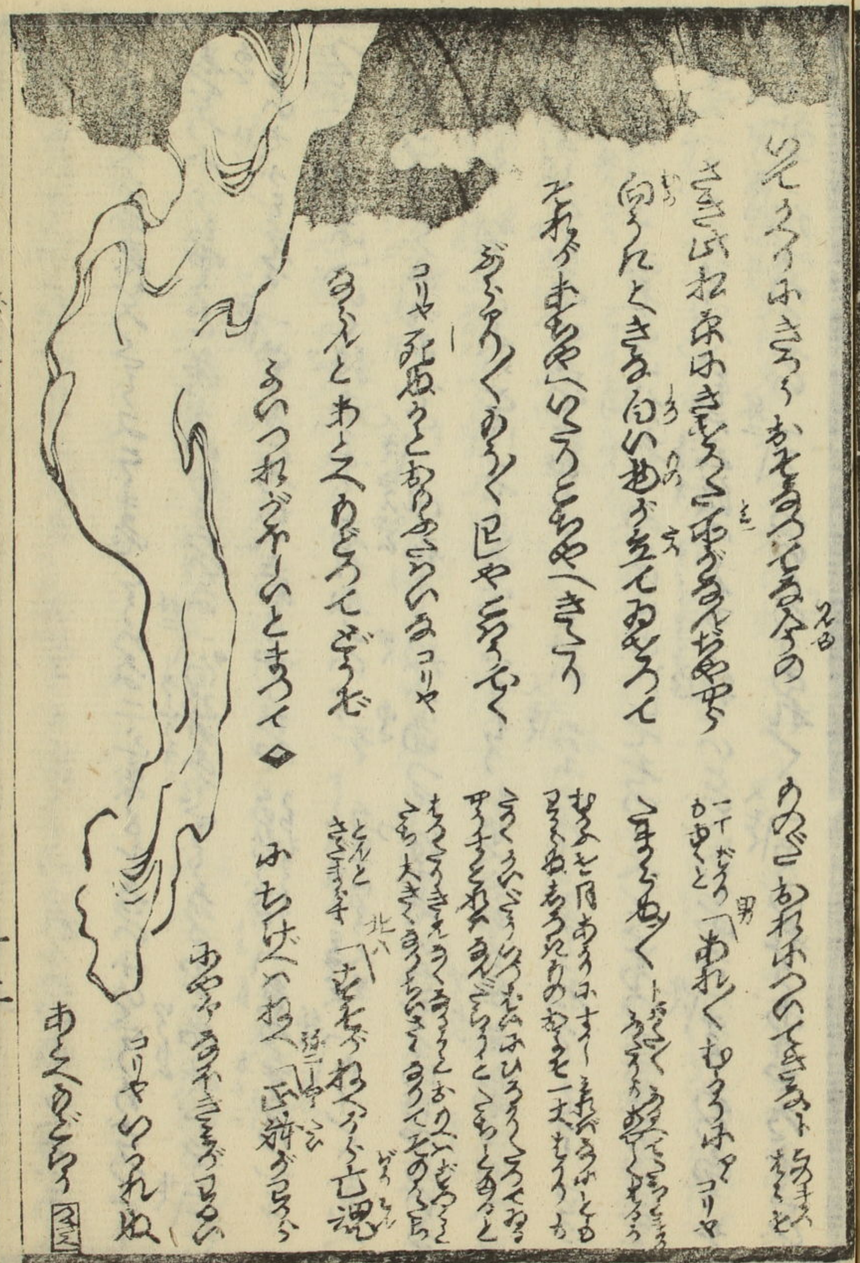
男「コリヤあとで[illegible]

弥二「[illegible]

松坂 ウ里 二り

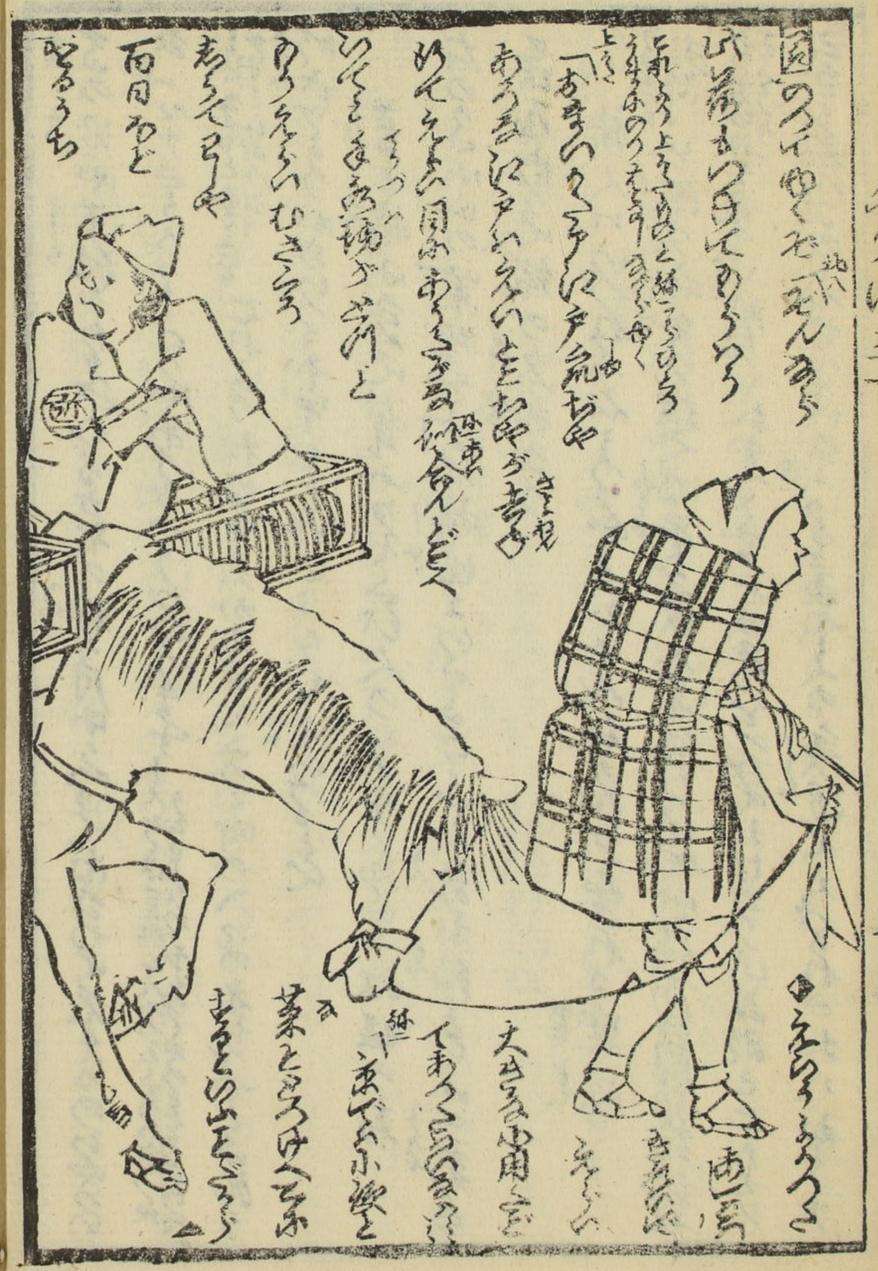


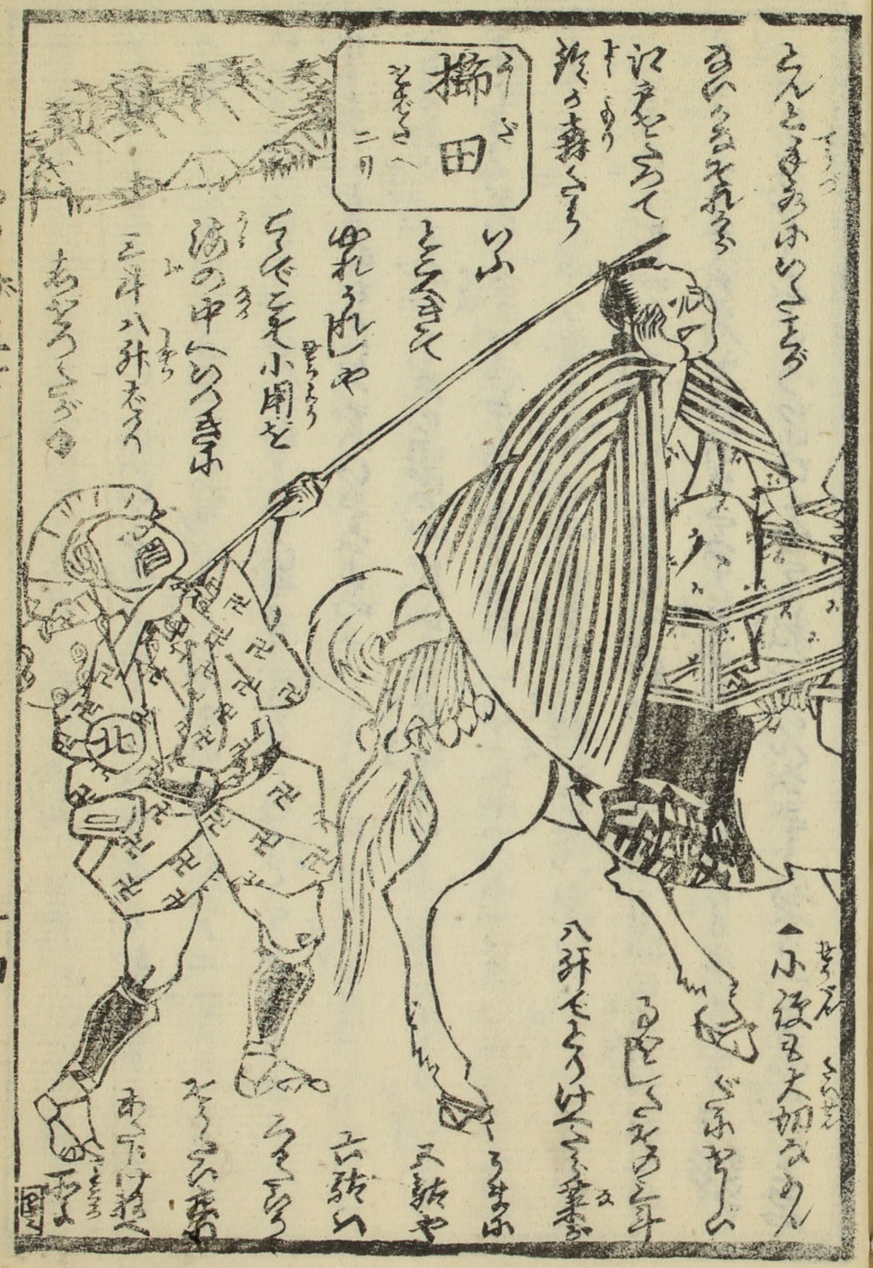
又おめへが
こちくせくこりゆ
ひんなぬよ
アモ西れて思ってが
まやくおめへがおくび申
ものでおちつけ「これからの
三人ごろら大丈夫ご「イセく此さ
とろとえらいこがあるぞ「なゆが
えらい「きろんせりゆ
ものごおれについてきなト
さき此れ来にきまろこ「あれくむろうにゆ コリヤ
向うれときな白い地が立てゐるろて
それがおもやへいてうこちやへきこり
ぶらりくあるく巳やこちらぞく
コリヤ死ぬうとおりゆこらいなコリヤ
なんとあとへあどろてどうだ
ないつれがかしいとまろて◆
ものごおれについてきなト
「あれくむろうにゆ コリヤ
こまらぬく
「さきがねへから亡魂
にちげへいねへ「正辨がこうら
コリヤいつれぬ
あとへあどろ



男「女もかまいてをふちのふ又来ドこがざりもこそりてゆうれんにはあく人のどろどろ
つれの人が出来たとて又こまいとつけなが二三度もきやうにいでたのだろう
あとのつらもあれど夜があけるとその男 弥二「白粉者がふらふあるなど幽霊だらう 北八「ぞや
まいのだがきえる 男「それとうちへきえるやうだの 弥二「意の字の筆を引 弥二「外く
つんぐらるには いく後ある中ふ忘れ出らい ナアニ 甲「そ 人にはつけた人足
ぐらいだろうときあきて 「近在から役に出つて津まで行きとるのだが幽霊だぜ
弥二「そりやア いかさまへのぞうしてきなすつたが たちつかぬ人
人ならずら与えるのはきせきつけぞ また 人足「おらがのんでかわらぬらつうろ
なんだ 北八「イヤあそこに化物があるのにぞうしてそのまま人とこあつてきてこのごとぞ
又そこに 人「コリヤとかうきへかへし後の藤かた孫がいふてこのどやき 北八「まあ あの事を
きかせ 人足「何があるさ 弥二「アノ虫のものがあれく 人足「ウ あれからありやろさせ

なるの響や笑談がわきでいるがその噺に月日をわすれて白子て又そめのちやには
弥二「いつまでもここにあらぬがあつかうたまへ 人力に一ツしてこの
これなり松坂に来かかの男を大手町の入口の木むかへ中々に酒り
からいうやうかきいつる事にまたもれぐうらんを立いづるとて
葉手の勝手ある難ふうその人のをだがり所と松坂の宿
右のかた小山の薬師をおがみ櫛田といへる所に勧ふ教とありし二郎の
茶屋あり又縁の名物あり
旅人はいづれもなつかしやとおめんおかんが賣れる饅頭
櫛川を渡り新茶を越て明星が茶屋に休む此村
大和田の弱きつけて 北八「ありく おまへがたの藤をつけておいたり此且那と二たアノ
ふたりともまのてんせんなりは 弥二「いやさ茶屋の銭道て大づれさ北八 あからア




搗田

おもしろいもんじやさかい三月じや花見のおしやうでんくに暴番をうつにある時様の
音がおんまんぞうもいにさ西のいくが士家のうちはなやかなもんおさへつくやの薫の
ものかきてそのいくさやのへおきれかく 上がた「いやそれよりお江戸の吉原のさかい
はえらいことじやさかいおまへさんせいでもまたひとつしやぶくいうてこさる一番もあのさ
せんちな 弥二「そりやおかへりがごういあるまいて 上がた「さて一つ十月頃から 弥二「十月までのあつて
くまるもの 上がた「それでも京の四字や嵐山の錦年中さきがけんとあるまい 弥二「そうじやア
木それでからまい四季中あいありまして 上がた「さあちやうどイヤス江戸は長唄を
かうく上方や京の芝居閨や四條夫ハ特別なるものでもあるの 弥二「なかなか京そう
どのやうなもう「関あれうるちのやうト新町揚屋「やつてるいよ島原めて
みちうにあつかりの扇を手に見を持こんでもるまれひとちやうチンくく
弥二「おかりいろくサントうけはりひく芸子もりまうろ「それじやおいてさん

ういおかうふつのてやりおきおれや 北八上方のがあゆうとゆえんなおふを呉ゆくおかさ
おもこ一上方「チンチリツツ十六くかんふをうどこ来る君の婚くるひとつ七もやまい
あんでも所望の歌及羅刹牧・かト七十とまつト 北八あきれてあるまる
上「ヤアそれやごやうじやの人のあてまくつがてうちをうごめ 弥二「ハてそれが一へん今の名
を 上がた「ちんふをまごあふれのうらいくにらうへうそおちやまいあんでもが去来の歌を
羅刹つあるあけて 北八あきれてまじめにみる 上「あのくそぶ空へごあつさまト 弥二さんくそが
のくおもろういうても 弥二「おりのふたぶがるうかむつかしいのうるてもんをせへ
上「そうやるんおでも出かまえ又つむりそうちゆ天のまゝかう 弥二「そうちうかそおかう 上「ヱん
あゝうまい一度やすおさよさん 上がた「あんでもかいやくのでゝやらせうつあるあかあげて
丁とうつ 弥二「アタしゝ北八おれらがころやがする 上「ハテさうさかい
コレゲつかりこう六ありみいこまさんがやあ・わしにて与うらさ 北八「コレヽかげつて

おなえいまい「まいとしいまやせんいる　北八「おりらいまらねいけまつゝこい
やらうめぐ云「やらうとしなぢやいまこまさんいえらひかとぶひこうんさま　北八「あんさ
この屋ら垢かさろきうそうてきふろいねへやらうめぐあんまうくこつきやかなと
ひきなりおなすさ「おりまいさアおとしてアやんせ　北八「ヌまろ逆様にあつことして
やらうゝ　るのまりとひつまり　るおまりてまなる　上「やアコヤ　こまらんく　孫二「おれもこまらんく　まこ「こまらくまつ
あトゆく　あるこまんちゃ　ゆけのまとすれ　小だこまつれ　ちまを　ちーしこ人　くまらなまにすむと　上さこりの　北八にまいまい　上さこ「コレおまいいまんとしてつしが
つゆうとうこんしこ　孫二「ゆうゆこまあませ人　かこげくに　旅ぢやアいろくまとがある
りんこ才　れうくまあませ人　ころちが一おいうひやせう　ト　さけさまとうませ　さうりりと　上さこりのうひ　ひえうらうちゃ　さんく
おひがまりて　上さこ「こうや　えらうよ　こいまコレ孫次さんとゆうつしやおまいがえらう
こまえおやが此　ころいいうんさや　えんというんかねどおまいのつれぢやまこてが
まいうう　まうおやまいういつしる　古市へいあるのちやまこれから山田の妙見

にいつまらに　とまつて　古市が　おめにかけたいまアこしやあとぞいえらうきれる
がま　絵ぶのせうあげ
のざしれ　菊壽橋の
菊の　旨　旨屋の私の
るこしが　東内まる
さひいうんせんう
どうちゃいま　ト　やらうに
おとまいうし　くんの
上さ「見うら　慨世　古代

あらはして妙見まちの茂屋とあるだやまいかいなさかくのうらいとかいな
へどりや出かけやせう　宮門のふなりてあり
宮門や神に拝縁をむまぐんとせらるゝ水のかげの白やふ
○是より大ゝ溝中に入まどりふ河沽世栄屋某に對面の
をかしきこゝろ江来宮古市の大洒落再び東海屋を經て
大津伏見まで到る爲の滑稽新書を補ひ四編一冊にをさめ
又十二神満尾又編へ京見西六編へ雅波遊続いづれも
引つゞき出板佳

道中滑稽譚三編下之巻終